

—文化系の趣味を持つ人々をつなぎたい。

「自分と似た趣味を持つ人が世の中に存在しているのだろうか？」
そう思ったとき、手に取った雑誌が教えてくれた。
“あなたは、一人ではない” 自己表現して、セカイとつながる

創星

Presented by
stardustbooks

第8巻

歌十首「一秒」
鳩山豆子

本
詠人不知

ブライズ
衣空

レペーターの妖精
マチコ・ファルケンボーグ

者のおくりもの(上)
しなおかななし

ブカル対談第8回
鳩山豆子×一路真実

Y×XX
馬場貴生

ラシック教養のお時間
天沼太郎

THE FOOL
詠人不知

d time story
mai

系男子×理系女子
一路真実

TAKE FREE

無料です。ご自由におとりください



—文化系の趣味を持つ人々をつなぎたい。

「自分と似た趣味を持つ人が世の中に存在しているんだろうか？」
そう思ったとき、手に取った雑誌が教えてくれた。
“あなたは、一人ではない” 自己表現して、セカイをつなごう

創星

Presented by
stardustbooks

第8巻

短歌十首「一秒」
鳩山豆子

宮本
詠人不知

リブライズ
衣空

エレベーターの妖精
マチコ・ファルケンボーク

賢者のおくりもの（上）
しなおかななし

サブカル対談第8回
鳩山豆子×一路真実

XY×XX
馬場貴生

クラシック教養のお時間
天沼太郎

THE FOOL
詠人不知

Bed time story
mai

文系男子×理系女子
一路真実



TAKE FREE

無料です。ご自由におとりください。



創星

⑧

目次

- 3 短歌十首「一秒」 / 鳩山豆子
- 5 宮本 / 詠人不知
- 8 リプライズ / 衣空
- 14 エレベーターの妖精 / マチコ・ファルケンボーグ
- 18 賢者のおくりもの（上） / しなおかななし
- 35 サブカル対談第8回 / 鳩山豆子×一路真実
- 41 XY×XX / 馬場貴生
- 42 クラシック教養のお時間 / 天沼太郎
- 45 THE FOOL / 詠人不知
- 47 Bed time story / mai
- 56 文系男子×理系女子 / 一路真実
- 66 Philosophy of stardustbooks
- 67 編集後記

表紙担当・・・ To's job

*短歌十首

「一秒」

低く飛ぶ影に重なり透きとおる
忘れることがあなたはこわい

30年後、に仲直りする夢をみる
鍵穴みたいに静かな真昼

鳩山 豆子

春からだと透きとおる沈黙に一秒後には真実になる

剥がれないタイプの付箋を体中にくっつけている お前のかたち

砂浜に寝ころびマッコリ飲んでいる一秒ごとに過去が生まれる

一秒で終わるからって論されて 暗闇にいる 触れれば消える

こんばんは隣で眠ってよいですか やさしいクジラかなしくじら

嫌いじゃないと好きの間の距離ぐらい飛び越えろばか 共感禁止！

ラジオからコーラの雨が降る予報 あたたかいまま眠りに落ちる

壊れるという自主性もある オレンジのカップに注ぐ日だまりの影

宮本

よみびとしらず
詠人不知

場末のバーカウンターで一人呑んでいた。いつものように山下は、待ち合わせ時間に遅れてきたが、それを謝る事もなく隣に座った。山下が遅れてやってくるのは毎度の事で、遅れた理由を私はわかっていた。

答えは「宮本」だ。

山下は学生時代からの友人で、同じ剣道部に所属した事をきっかけに、社会人となった今も週末になると、この場末のバーでいつものように待ち合わせをして、グラスとグラスをぶつけ合っている。

私と山下とは、いつもライバル関係にあった。

勉強では学年トップを争い、剣道部ではエースを争い、恋愛までも同じ女性を争った。

待ち合わせ時間にわざと遅れて、今宵も私を負かしてやろうなどと、山下の事だから考えているのだろう。

山下は昔から何かにつけて理屈っぽい奴だ。いや、理屈にもならない屁理屈っぽい奴だといった方がいいだろう。

先週もそんな話になり、山下は山下で私の方が屁理屈だ、などと言いつつ朝まで討論は続いた。

「だからな、固体になれば立派なものだ。例え、それがクソだとしてもだ。形として残るからな。でも気体のままだとそこには形とし

て残らない。」

「いやでもな、クソだろ？クソなど形に残して後世、恥を晒すだけではないか。それなら一層、気体のまま風に吹かれたい。」

「だからな、結果クソだったとしても固体には間違いないわけで、この世に1つの流派を立てたという証は残るわけだ。流派を立てる、つまり字の如く立派だ。気体は固体にもなれない半端もんだ。」

「いやでもな、所詮はクソだ。残しても無駄だ。無駄なものを残す事の何処が立派なんだ？役立つものを残してこそ立派だろう。」

「だからな、理屈っぽい屁理屈っぽい奴は理屈っぽい奴から出た屁に過ぎないって事だよ。」

「いやでもな、そもそも理屈っぽい、屁理屈っぽいって、ぼいじやないか。理屈にも屁理屈にも似せてるだけの偽者だろ。それこそポイだ。」

「だからな、今言ってるのはそういう事じゃないんだ。理屈と屁理屈。理屈は1つの存在だ。屁理屈は理屈から出た屁に過ぎない。」

「いやでもな、屁も1つの存在だ。存在 VS 存在。50..50。」

「だからな、なぜ50..50になるんだ？屁理屈は理屈から出た一部に過ぎないんだ。理屈と屁理屈の比は99..1といっても過言ではない。」

結局、山下とは先週も決着がつかず、ドロ、いや、泥試合となった。私がそんな悪夢を思い出している頃、隣に座った山下はウィスキーをダブルで注文して、少しグラスを口に付け、こちらにニヤツと不敵な笑みを浮かべた。

ダブルと二刀流をダブルして、宮本武蔵気取りとでもいうのか、この山下め。

そんな薄気味悪い山下が、薄くなってきた前髪を撫でつけ、ウィ

スキーを少し呑んだ後で、フレームの細い黒縁眼鏡に潜む細い目でこちらをキッと睨み、試合前の挑発をかましてきた。柔剣道場で竹刀と竹刀をぶつけ合う前のあの時と全く変わらない。

「今宵はお互いのグラスの中身に、もはや勝敗があるようだな」

「はあ？ どういう事だ？」

「勝者は女性から好かれ、敗者はこの場を去るのみって事だ」

「はあ？ それとお互いのグラスの中身に、何の関係があるんだ？」

「まだわからないか。やはり今宵の勝敗は見えているようだな。私が注文したのはウイスキー、君はブランドー。」

「…く、くだらん。」

「しかもダブルだ。二刀流、宮本武蔵先生だ。はっはっは。この後、君はぶら〜んと両手を下げ、がっくり肩を落として出ていくんだろ。うな、一本取られましたってな。はっはっは。」

山下の挑発は、昔から変わらない。長年の経験上、私はもうその手には乗らない。

「さて、ダブル、二刀流、2という数字が出てきたので聞きたいんだが、君は二段階右折というものを知っているか？」

「…ああ。原動機付自転車やらなければいけない交通ルールだろ？」

「そうだ。だが、私はどうもあの名称が腑に落ちないのだ。」

また屁理屈を言い出したと心の中で思いながら、山下の屁理屈持論に渋々耳を傾けた。

「二段階右折。つまり二回、段階を踏んで右に曲がれ、漢字の通り

なら右に折れるという事だ。」

「そうだな。二回段階を踏んで、右に曲がる事だな。なんだ？それがどうしたんだ？」

「二回、段階を踏んで右に曲がるんだぞ、漢字の通りなら右に折れるんだぞ。頭の中に絵を浮かべてよく考えてみる。右に一回曲がる。更にもう一回右に曲がる。つまり、Uターンになる。二段階右折イコールUターンという式が成り立つ。つまり来た方向を戻る事になる。」

「いやいや、右に曲がる事を二回に分けてやりなさいって事だろう？」

「ならば、一段階目左折による二段階右折だろう。」

「なんか解りづらくないか？」

「もつと厳密に言うなら、一段階目左折Uターン後直進による右折完成！」

「な、なんだ、それは…。」

「いいか、頭の中に絵を浮かべろよ。二段階をかけて右折する為には、まず交差点を左に曲がる。その段階では行きたい方向に背を向けているから、ここでUターンをかます。その後は直進すればいいだけだから、答えは一段階目左折Uターン後直進による右折完成！となる。」

「じゃ〜聞くけどよ、仮にその標識があつてみる。一段階目左折：Uターン…後…直進による…右折？パッと見て人は判断できるのか？」

「一段階目左折Uターン後直進による右折完成！だ。私は簡単に解る。」

「そりゃ〜、自分で考えたから解るかも知れないが、普通は解らないだろう？」

「その為の自動車学校じゃないのか？」

「その為か知らないけど一度勉強してても、道でバツと見たら解らないだろう？」

「その為の自動車学校じゃないのか？」

「…いやいや、でもな、学校で勉強してても時が立てば忘れるって事もあるだろう？」

「では、ここをしっかりとマークしておけ。大事な箇所だ。試験に出るぞ。」

「…いや、だから、もつと簡単に出来ないのか？一段階目左折：Uターン：後…えゝ直進による右折完成。」

「最後にちゃんとビックリマーク入れろや！一段階目左折二段階右折後直進による右折完成！や。」

「さつきと変わつとるやないか！」

「あのな、式を使うんだ。Uターンイコール二段階右折って先ほど習つたら？習わなかったのか？どっち？なら…なら…」

「…な、習いましたあ！」

「習つたな。お前は習つたな。習つてしまったな。習つたことをしつかりその頭に入れこみ日々精進する為に」

「…あ、あの…先生？…み…宮本先生？」

「はい、宮本です。」

「先生が先ほどおっしゃってた式なんです…」

「はい、Uターンイコール二段階右折です。何度も何度も習つたことを聞かない！」

「あ、いや、そうじゃなくてですね、先生は…」

「先生？」

「あ、み、宮本先生」

「はい、宮本です。どっから見ても宮本です。」

「み、宮本先生は二段階右折の表記が腑に落ちないとおっしゃってましたよね？」

「はい、わたくし宮本はおっしゃってました。」

「先ほど、せ…宮本先生がおっしゃってた式を使えば、腑に落ちない二段階右折の表記そのものはイコールだったUターンという事でしたが、それは間違いですよね？」

「いいえ、断じてこの宮本に間違いはありません。」

「いやでも、二段階右折とはUターンする事ですか？」

「だ、だから宮本は腑に落ちないと言ってるのです！シヤラップ！」

「ではUターンイコール二段階右折は間違いですよね？」

「シヤラップ！」

「…。」

「はい、メーン！」

「…。」

「いっぼくん！勝負あり！グツバ〜イ！」

ヤツは奇声を発しながら場末のパーを出ていってしまつた。しかし、何なんだろうか、あいつは。

隣でそのままになっているウイスキーの入ったグラスが、氷が溶けると同時にカランと鳴った時、私は呟いた。

「宮本…いや、山下やろ。」

(終)

小説家はパソコンのディスプレイを睨んだまま悩んでいた。開けたばかりの缶ビールは次から次へと空になり、空き缶をピラミッド型に重ねている。手持無沙汰な日々に飽き飽きして麦茶のようにビールを飲んだが、味は感じないし、何も面白くないことは起こらない。

書くべきものは何一つ浮かんでこない。白い画面に文字を打ち込んで消し、ほんの少しだけ文を変えて打ってはまた消しの繰り返しだった。気分転換に本を読もうとページを開いても、自分が書かなければならないものが気にかかり、一行も目で追ってられない。ここ数年というものいつもそうだった。自分で小説家を名乗るからには、それなりに何か書かなければならないと思うと気が焦るばかりで、まともに何一つ書き上げることができずにいた。もう小説家などと名乗るのも、物を書くことも辞めてしまおうか、飲めば飲むほどそんな考えで頭がいっぱいになってゆく。パソコンにも、文章にも、それを捨り出すための酒にもうんざりなのだ。

冷蔵庫から最後の缶ビールを出して開けようとしたとき、どこからか携帯電話の音が鳴った。小説家はパソコンの周りを探したが携帯は見つからない。鞆の中やクッションの陰を散々探し、ようやくベッドの枕の下にあることに気付いた。着信音はまだ鳴っている。小説家は画面に表示された名前を見て驚き、一瞬首を傾げた。電話

に出ると、もしもしという懐かしい声が聞こえた。

「俺です。こつちに帰って来てて、今家の前にいるんですけど、今から飲みに行きませんか？」

小説家はカーテンを開け、かつて電話の相手が迎えに来たときにいつも待っていた場所を見た。街灯の光から少し外れたところにあった人影が小説家の部屋を見上げ、窓から光が漏れたのに気付くと大袈裟に手を振った。振った手の指先に、小さく赤いタバコの火が光っている。

小説家は五分待つように伝え、部屋着からシャツとジーンズに着替えた。すると自分の体からビールの匂いがすることに気付き、歯を磨き、顔を洗う。自分の顔を鏡で見ると、頬の辺りが不自然に赤いような気がしたが、小説家はそのまま財布と携帯だけ持って外に出た。

エレベーターを降りると、電話の相手は自転車に跨ってタバコを吸っていた。腰を曲げてハンドルに体をもたせ、背中にはギターのケースを背負っている。小説家はしばらく物陰から男の姿を見ていた。

その男は音楽家である。小説家と音楽家は飲み仲間のようなものだった。二人がいるところには必ず音楽と酒があり、音楽家の存在が小説家にとって、「書く」ことの原動力になっていた。時々会って酒を飲み始めると、音楽家はいつも歌を歌った。自作の歌や、古い有名な歌、聴いたことのあるけれどよく知らない歌、色んな歌を歌っていた。ステージの上で歌う音楽家はもちろん華やかさがあつ

たけれど、そうして何気なく、それでいてフルコーラス手抜きもせず、時にはギターを弾きながら歌う姿こそ、音楽家の存在感が真に発揮されていると小説家は思っていた。

そんな音楽家がメジャーデビューを目指して地元を離れ、東京に行ったのは五年前のことだった。いつかそうなるだろうと思う程度に、音楽家には才能があると小説家は確信していたが、諸手を挙げて送り出すほど音楽家が遠くに行くことを喜んではいなかった。そして小説家が何も書けなくなり、小説家を辞めてしまおうかとまで考え始めたのは、音楽家が東京へ行ってしまった後のことである。

小説家はエレベーターホールを出て、わざと不機嫌そうな顔で音楽家に近づく。

「何時だと思ってるの」

そう言った小説家は笑顔で顔が歪んでいた。音楽家はへらへら笑いながらすいませんと言った。

「でもどうせ独りで酒飲んでたんでしょ？」

「小説を書いてたんだよ」

音楽家はくわえタバコでまあいいじゃないですかと言って、自転車の後ろに乗るように言った。まあいいか、小説家はそう呟いて特に抵抗もせずに自転車の荷台に横向きに座ったが、音楽家の背中のギターがどうしても邪魔になる。

「ギター持つよ」

そう言って音楽家のギターケースを持ち、背中を二度叩いて出発進行の合図をした。夜の闇に包まれた住宅地は、街灯と自転車のラ

ンプだけが道を照らしている。音楽家と飲みに行くことがなくなり、滅多に夜の外出をしなくなった小説家の頬を撫でる空気が、とても冷たく乾いていた。

二人とも黙っていたが、自転車の向かう先は決まっていた。暗い住宅地を抜け、交通量の多い大通りに沿って自転車を走らせると、遅い時間でも一際明るいアーケード商店街に入る。夜中であることを忘れるほど明るい人が通りの少ない商店街を自転車のまま通り抜け、アーケードが途切れたところで路地に入る。ここで二人はようやく自転車を降りた。

その路地は両脇に二階建ての建物が隙間なく並ぶ、古くからある飲み屋街だった。移動型の看板を出している店もあれば、一階の天井ほどの高さに、白地に店名だけ書いた正方形の質素な看板を出している店もある。二人が向う店は看板を出しておらず、ドアに店名が書いてあり、ドアの横の窓に明かりが灯っていれば営業中という店だった。

ドアの脇に自転車を停めた音楽家がドアを開け、ヤマさんと声を掛けながら店に入り、小説家はギターを持ったまま後に続く。

「いらっしやあい」

間延びした男の声が店内から聞こえてきた。するとカウンターの陰から男が顔だけ出し、音楽家の顔を見ておとおと声を上げて立ち上がった。

「ひっさしぶりじゃん、座れ座れ」

音楽家に「ヤマさん」と呼ばれた男は小説家が最後に音楽家と店

を訪れたときと変わらず、ヤマアラシのように逆立った艶のない銀色髪をして、耳にくつもピアスをしていた。この店のオーナーである。小説家はこの男の「ヤマさん」というあだ名が髪形に由来するのか、本名が山田だか山本だかいうのか、未だに知らずにいた。

カウンターの脇にギターを置き、音楽家と並んで座った小説家の顔を見たヤマさんが、音楽家に話すよりは僅かに丁寧な調子で、久しぶりだよねえと言った。

「そうですね、もう五年は来てなかったから」

「こいつが東京に行く前に来たのが最後ってことかあ」

小説家はカウンターの椅子をくるりと回転させて、約五年ぶりのバーの店内を見回した。

そのバーは元々音楽家の馴染の店で、五年前と少しも変わらず、見るからに荒んだ感じがした。壁にはべたべたとけばけばしいクラビベントやライブの宣伝のポスターが貼られ、ダーツの的が置いてある。黒ずんだ赤の革張りのソファはもはや高級感など微塵もなく、皮の破れた背凭れから中のスポンジが覗いていた。テーブルやカウンターに置かれた古いアルミの灰皿も色がくすみ、あちこち凹んでいる。以前、店内でケンカを始めた客が灰皿を投げつけているところを見たことがある。そんなことが何度もあり、灰皿が変形しているのかもしれない。

カウンターの隅にはギターが立てかけられ、無造作に髑髏や、有名無名様々なバンド名のロゴのステッカーが、元のギターの色が分からないほどびっしり貼られている。最後に来たときと、店は何一

つ変わっていない。

小説家は隣に座る音楽家の顔を、今夜初めてまじまじと見た。およそ五年ぶりの音楽家の顔に、小説家はうら悲しいものを感じずいられた。音楽家は最後に会ったときは髪が長く、前髪で眉が隠れるほどの長さがあったけれど、今では短く切りそろえられている。顔全体がはつきり見えるようになって顔の細部まで見えるせいなのか、顔に浅い皺が刻まれ、頬はずいぶんこけて老けた印象が否めない。人間は五年程度でこれほど印象が変わるのかと小説家は驚きを隠せなかった。それを口にした瞬間、

「しかし二人とも、五年会ってなかったのに変わらないですね」

と、音楽家が小説家を見て言った。

「人間、たかだか五年程度でそんなに変わらないよ」

小説家は咄嗟に答えたが、正に言おうとしていたことと正反対のことを言っただけだった。変わるのだ、人間はたかだか五年で変わってしまうし、五年という月日は人間をいとも簡単に変えてしまうのだ。現に小説家は、五年前には頭の片隅にもなかった「小説を書くのを辞める」ことを真剣に考えている。

ヤマさんは小皿に大盛りのナッツやスナック菓子をカウンターに置き、二人に向かって何を飲むかと尋ねた。

「俺、ビール」

「コーラください」

アルコールの味に飽き飽きしていた小説家が言うと、音楽家とヤマさんが怪訝な顔で珍しいと声を合わせた。

ヤマさんはビールとコーラを出す前にがちゃがちゃと音を立てながら、三本の試験管をさした木製の試験管立てを置き「その前にお祝い」とだけ言った。

「何の？」

音楽家が尋ねると、ヤマさんはまあいいじゃんと言って笑っているだけだった。

試験管に注がれていた無色透明の液体はテキーラで、三人で試験管をカチンと鳴らし、同時に一気に飲み干す。小説家にとって無色透明の液体は、テキーラもウオッカも焼酎も日本酒も、水と大差なかった。ただ音楽家と飲む酒は、独りで飲むビールに比べて格段に美味かった。仮にそれがただの水だったとしても、酒に酔うのと似た気分は十分に味わえた。ほんの少し前まで部屋で飲んでいたまぜい缶ビールの味も、書かなければならない小説のことも、全て忘れられるようだった。

音楽家と小説家が試験管を試験管立てに戻すと、ヤマさんは無造作に試験管を三本一緒に手に持ち、試験管の底にそれぞれ僅かに残っていた数滴まで喉に流し込む。それを見た小説家は損をしたような気がして、また酒が飲みたくなかった。

ヤマさんはカウンターの下の冷蔵庫から、小説家が家で飲んでいたのと同じ缶ビールを出し、音楽家の前に置いた。そして小説家の顔を見て、本当にコーラでいいのかとでも言いたげな顔をする。

「やっぱりジントニックください」

ヤマさんはオツケーと言ひ、音楽家はそうでなくちゃと言って立

ち上がると、自分ではなく、店に置いてあったギターを手に取った。カウンターに座り直すと慣れた手つきでチューニングを始める。

音を探るようにしながら鼻歌で歌い始めた曲は、小説家の好きな曲だった。小説家が音に合わせて歌いだすと、音楽家は「待って」と言った。まだ完全に音が合っていないかつたらしく、ワンフリーズ歌っては首を傾げベグを回す。小説家はヤマさんが出してくれた酒を飲みながら気分がよくなり、勝手に歌を歌い始めた。それに合わせて音楽家はギターを弾こうとしたが、すぐに諦めてギターを自分の隣に置いた。小説家はカウンターに頬杖をついたまま相変わらず歌い続けている。それを遮るようにして音楽家が言った。

「俺ね、音楽辞めようと思うんですよ」

小説家は音楽家の言葉に驚いたが、それを隠すようにしてちらりと横目で音楽家を見て、ふうんと一言だけ呟く。ヤマさんは試験管を洗い、力いっぱい振りながら水気を払って、どうしてとだけ言った。すると音楽家が小説家の顔を見て、

「あなたの方が、歌が上手だから」

と、本気とも冗談ともつかない笑顔で浮かべる。ヤマさんは鼻で笑い、小説家は相変わらず無言で酒を飲んでいった。

「辞めてどうすんの？」

音楽家はヤマさんの問いに、どうしようかなと曖昧な返事をした。「とにかく、辞めることは決めたんです」

先を越された、小説家はカウンターの奥の棚に並ぶ酒のラベルを目で追いながら思った。

「辞めるって言っても、ライブも結構お客入って、アルバムも出して順調だったんじゃないの？」

ヤマさんはどうしても音楽家が音楽を辞めることに対して納得がいかないようで、立て続けに質問を浴びせかけている。小説家はその間も酒のラベルの文字を目で追っていた。小説家にとって音楽家が音楽を辞めようと続けようと、もはや興味もなくなっていた。ただ小説を書くのを辞めようと思っていた小説家よりも先に、そんな様子を少しも見せなかった音楽家が「辞める」という宣言をしたことが、小説家にとって少なからずショックだった。

「ヤマさん、もう一杯同じのください」

小説家は空になったグラスをカウンターのヤマさんの方へ押しやり、頬杖をついた。

「スイッチ入って来たねえ」

「久しぶりに美味しい酒飲んだ気がして」

それを聞いた音楽家が、俺が音楽辞めるのが嬉しいんですかと、笑いかみ殺すような妙な声を上げた。

「辞めなければ辞めればいいじゃん。音楽なんか、やりたくないのに続けて何かいい物できんの？」

その通りだと、淋しそうにヤマさんは同意していたが、小説家は自身の言葉で我に返ったようだった。小説だって同じことだ、辞めなければ辞めればいい。義務ですらないのに、惰性で何か物を作り続けて、いい物ができるわけがない。音楽家に先を越されたからと言って何なのだ。

すると音楽家は落胆を隠しきれない様子で缶ビールを飲み干して言った。

「辞めるなって、止めてくれるかと思ったのに」

「止めて欲しかったの。本当は辞めたくないんじゃないの？」

音楽家はタバコに火を点け、溜息と一緒に煙を吐き、煙にはそうなのかなあという言葉が乗っていた。小説家は音楽家の横顔を覆い、静かに消えていく煙を見ながら、自分の気持ちの中から余計なものが一緒に消えていくのを感じている。

「ちよつとしたスランプで言ってるなら、まだ撤回できるぞ」

ヤマさんが再び試験管立てをカウンターに置き、テキーラの入った試験管を三本立てた。酒でも飲んで忘れてしまえとでも言いたげだ。それぞれ試験管を一本ずつ手に持つと、一気に喉に流し込む。

「美味しいなあ」

小説家は思わず声を上げ、試験管を元に戻す。五年の月日で外見内面ともに変わり、音楽を辞めるなどと言い出しても、やはり音楽家と飲む酒は美味かった。

「最近小説は書いてるんですか？」

小説家は間髪入れずに全然と答え、自分の前に新しく置かれたグラスに手を伸ばす。

「アマチュアの作家なんて十年ろくな物書いてなくても、小説家だって言い張ってれば小説家なんだから」

音楽家は小説家の話を聞いているのかいなのか分からないようなぼんやりした顔で、静かにタバコを燻らせている。会わなくなっ

てから五年の間に変わった音楽家の顔を煙越しに見ていると、無性に何か書きたくなり、手の届く場所に自分のパソコンがないことが歯痒くて堪らなかった。

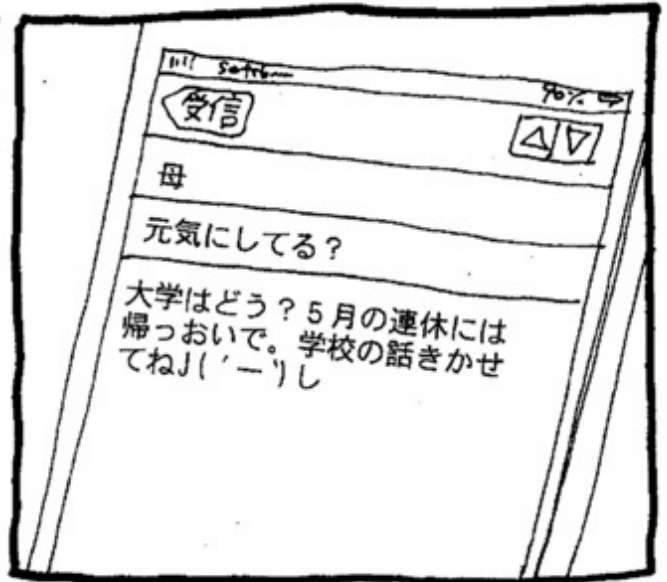
「小説家を辞めたいって思ったことないんですか？」

音楽家は再びギターを手にすると、適当にいくつかのコードを鳴らし、それを聞きながら小説家はどうか答えようかと考えを巡らせた。つい一時間ほど前に家にいたときに、小説を書くことにうんざりしていたという事実は記憶にあるが、どんな気持ちだったのか再現することが全くできないのだ。小説家を辞めたいという気持ちがどんなものなのか、今の小説家にはとても想像できなかった。

「どうか、あつたかもしれないけど、憶えてないよ」

音楽家は、一度は諦めて弾くのを辞めてしまった、小説家の好きな曲のイントロを再び弾き始めた。小説家は聴くだけで黙っている。音楽家は自ら歌を歌い、小説家はヤマさんと顔を見合わせて笑うだけだった。

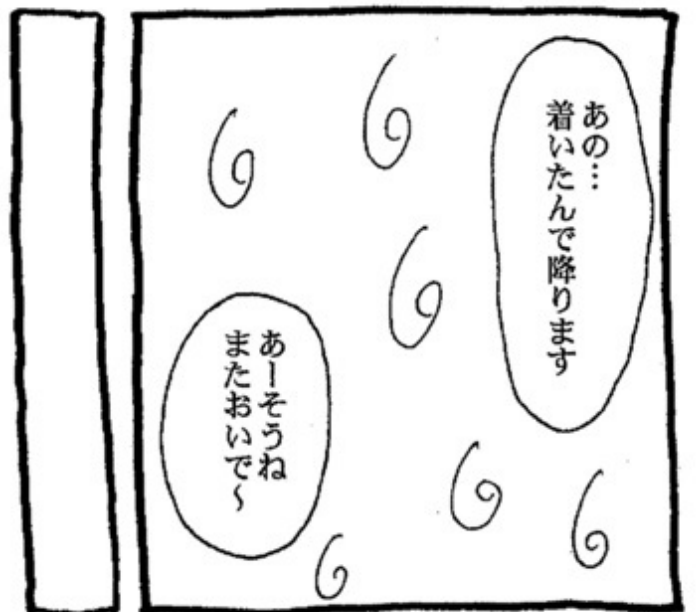
きつと音楽家がこれを手く歌い切れれば、音楽を辞めたいなどという気持ちなど、タバコの煙のようになくなってしまいうに決まっている。そう小説家は信じていた。



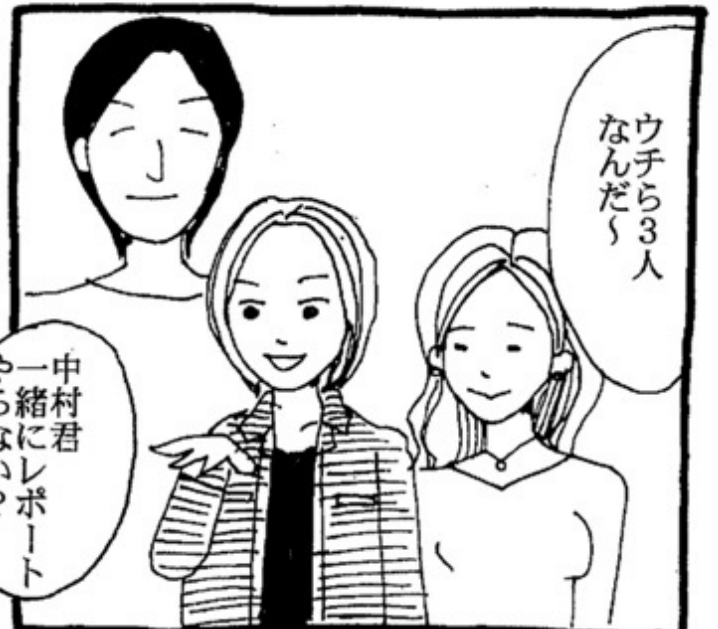


なにこのオッサン!

エレベーターでしょココ...







ウチら3人
なんだ

中村君
一緒にレポート
やらない？



ええ
そうかな

中村君って最近
雰囲気変わったよね
前はなんかくたくたく
話しかけにくくて



へんな素敵な
マシオン
じゃない

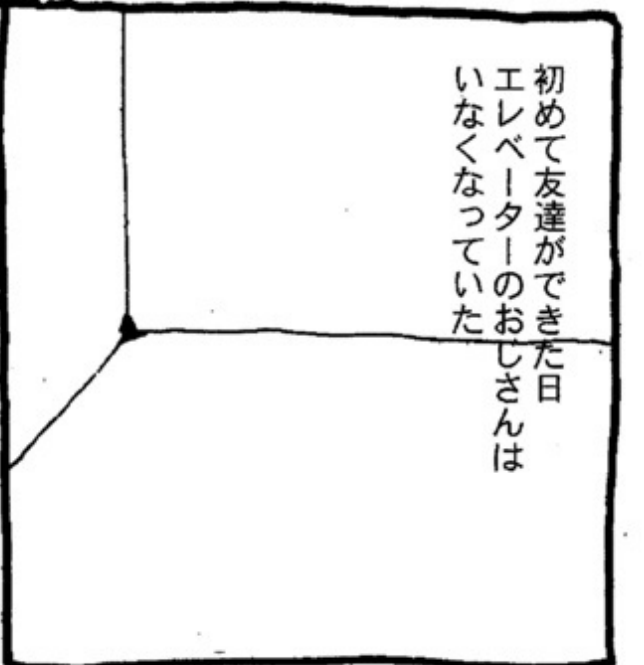


管理人室

ちなみに…
おじさんの正体は
おせっかいな管理人さん
だったようです…

もう
おいしゃんの
出番は終わりの
ごたね…

おわり



初めて友達ができたり
エレベーターのおじさんは
いなくなっていた

賢者のおくりもの（上）

しなおかなし

昔々あるところに、一組の貧しい夫婦がありました。

イブの夜に手にしたお金は、たったのドル八十セント。明日はクリスマスなのに。

妻は夫の贈り物を買うために、自慢の髪を切り落とし、立派な時計の鎖を買いました。

そして夫は妻のため、自慢の時計を売り払い、見事な鱈甲の櫛を買いました。

そうして迎えたクリスマス。貧しい賢者の贈り物は、贈られるべき相手を失くし、哀しく愚かに行き違い。

それは遙か昔に聞いた、遠い異国の物語。愚かしくも美しい、無償の愛の物語。

遠くでクラクションが鳴る。午前四時。まだ夜の明けない暗い空の下、海風の吹きつける中、魚と氷を積んだ小車とタクシーが行き交い、扇形に開いた屋根の下、通路に撒かれた水が跳ねる。

層では春が来たとはいえ夜明け前はまだ寒く、水と氷とで冷え込む空気を肺いっぱい吸い込むと、身体の中がキンと張りつめ、頭にこびりついていた眠気の残滓が一気に洗い流される。

「おはようっす」

「おっす、カズ坊。今日は早いな。何時に来たんだい」

「ジャスト三時。オヤジさん、今日はいいサヨリ入ってるな。どこの？」

「鏡子物だ。いいだろう？ カンヌキよりちよつと小ぶりであまい具合に育っていて、ちよつと小骨もあたらねえ絶妙の大きさになってやがる。上物だぜ」

自慢げに見せられた白い発泡スチロールの箱の中。敷き詰められた氷の上に並ぶ、すらりと細い藍色の背中と青白く眩い腹の色合いに目を凝らす。

「ああ、いいカタだ。それに鮮度も手当てもいい。このところ上物のサヨリはずつと品薄だったのに、今日はやけに入荷が多いんだな」

「まあな。おれも二十五年、これだけのサヨリがこんなにまとめて入ってきたのなんてそうそうお目にかかってないが、今年は潮の具合がよかったのか、中々出来がいいらしくてな。特に今日のこいつはその中でもとびつきりよ」

「つまそうだ。是非、刺身か昆布締めで食いたいな」

「あいよ。しかしそれにしても、お前さんって奴は女でも魚でも、美人にや本当に目がねえなあ」

「つて、勘弁してくださいよ。そんな人を節操なしみたいに」

「節操ねえだろう、実際よお。はは。ま、とにかくこいつは一押しだから、食いたかったら頑張つて落とすんだな。うまくいくよう祈つてやるよ」

「ありがとございませす。それじゃ、また」

豪快に笑う大卸のオヤジさんに手を振って、目を付けた品を手エックしながら、別の鮮魚の箱に目を移す。セリが始まるまで後一時間。下付けを済ませていると、隣でメバルとカスゴを見ていた先輩が突然声をかけてきた。

「おうカズ。お前今夜一杯どうだ？ 近くに新しくできた飲み屋、結構評判がいいっていうからよ。トモや彰のやつも連れて、一度行ってみようかって話してるんだが」

築地で働き始めて五年。なにかと世話になっている先輩の誘いを断わるなんて、普段は滅多にないけれど、今日ばかりは遠慮させてもらうことにする。

「すんません。おれ、今日ちよつと先約があつて」

「先約う？ 先約つてお前、男か？ 女か？」

頭を下げて断わると、先輩がそれまで魚を覗んでいた顔をすいと近づけて、今度はこつちを覗んでくる。店名が書かれた帽子をかぶった顔は結構強面で迫力があるので、思わず後ずさりかけながら、それでも正直に返事する。

「女です」

「女だあ？ お前あかりちゃんつてもんが有りながら、他の女とデートするたあどういう見よ。事と次第によつちや、ただじゃあ済ませらんないぜ」

「そんなんじゃないですよ。中学時代の同級生が久々にこつちに戻ってくるんで、一緒に飯でも食おうかって」

「それがデートって言うんじゃねえか。お前そのうち

どっかの路上で刺されんぞ？ただでさえ、あかりちゃん減法気が強いのに。大概にしとかねえと店先が真っ赤に染まっちゃませ」

脅しているのか注意してくれてるのかわからない台詞と一緒に、ずいずい先輩が迫ってくる。もう少しでト口箱を引っかけるところでなんとか踏み止まるものの、相手は少しも止まってくれず、平均台じみたバランスで上体を逸らし続ける。

「だから、そんなんじゃないですってば。それにおれが女泣かせるような浮気しないって、清さん知ってるはずじゃないですか」

「ばーろい。お前が女泣かせるつもりがなくても、よその女がお前に熱上げてえらいことになんじやねえか。今まで何回それで修羅場くぐってきてんだよ。」

「この色男が」

「だから、そういうのじゃないですってば。それにあかりには後でちゃんと、事情話して説明するつもりです」

周りはいつものことだと思つて笑つて見ているばかりだし、この忙しい時間帯に他人なんか一々構つていられないので、自分でどうにかするしかない。

必死の説得にようやく少しは聞く耳を持つてくれたのか、先輩はそれまで詰め寄っていた身体をようやく離して解放してくれた。

「ほおう。そこまで言つてたあ、本当にその手の話じゃねえんだな。珍しい」

「だからそうだつて、さっきからずっと言つてるじゃ

ないですか……」

げんなりした気分が眩いた。この手のことで自分の信用がないのは承知していても、朝っぱらから丸刈り強面の男に詰め寄られるというのは決して気分がいいものじゃない。

「ばーか。信用してほしけりや、普段の行いからどうにかしろつてんだ。で、どういう奴なんだよ、そいつは」

ヤリイカの箱を手エックしながら、話をそつちに移される。こっちはトビウオの箱を見ながら、仕方なくそれに返事する。不本意じゃないと言つたら嘘になるけど、ここで誤魔化したりしたら後々もつと面倒なことになるので、話せる範囲内で話すことにした。

「中学二、三のとき同じクラスで、卒業間際に親が離婚して、母親と一緒に関西の方に引っ越したんですよ。それまでそんなに親しいわけじゃなかったんだけど、そのときちよつと色々あつて、時々話したり、たまに会つたり、相談乗つたりして、引っ越してからも年賀状や電話でやりとりしてたんです」

「親が離婚ねえ。近頃じゃ珍しくもなくなつちまつた話だけだよ。やっぱ、落ち込んだりしてたのか？」

「離婚そのものは、そんなにショックじゃなかったらしいんですけどね。元々そんなに自分のこと構うタイプじゃなかったみたいだけど、その頃のあいつ、本当に見てられなくて、とてもほつとけなかつたんですよ」

「やけつぱちだつたつてことかい」

「……まあ、そんなとこかな。とにかく、それ以来話するようになって、それが今でも続いてんです」

真実全てもないけど、嘘でもない。自分のことならともかく、他人のこと、まして女のことについて、そうそう勝手にべらべらと全部は話せないの、それぐらいは勘弁してほしい。

向こうもそれがわかっているのか、それ以上その部分に突つ込むようなことはしなかった。

「久々にこっち戻つてくるって、どれぐらいぶりなんだ？今の口ぶりだと、親父さんはこっちにいるんだろ」

「引っ越して初めて帰ってくるから丸八年は経つてますよ。親父さんとはどうなつてゐるのか聞いてないけど、とつくに再婚してみたいだし。今回帰ってくるのも仕事の用事みたいで、終わつたらすぐ向こうに戻つて言つてました」

以上。そこまでが他人に話せるおれとあいつの関係だった。

離婚や再婚云々については少し言い過ぎたかとも思ったが、あいつ自身あまり気にしていないのと、比較的オープンに人にも話している事柄らしいので、説得材料としてぎりぎり開示した。

「そういう事情なら仕方ねえや。とりあえず、何も言わないでおいてやるか」

「どうも。あかりにはおれから話すんで、余計なことしないでくださいよ」

「ばーろー。誰にも言うてんてい。んなこと、一々言われなくてもわかってらあ」

わかっていることも多いから、わざわざ付け足しているのである。そこまではさすがに口に出さず、無言で下付けを終わらせる。

カランカランと鳴る鐘の音を耳にセリ場の方に足を向けると、最後にくいくいと袖を引っ張られた。

「とろろよ」

「なんですか」

「そいつってのは、いい女か？」

「だからそういう関係じゃないって、さっきから」

「ばか。わかってるって。そうじゃなくて、純粹にいい女かどうかって訊いてんだよ」

そういう関係じゃないとわかっている、やっぱり美人かどうか気になるのか。声を潜めて尋ねてくる先輩に、八年前のあいつを思い出しながら答えを返す。

「いい女ですよ。少なくとも、おれが会ったときまでは」

脳裏に浮かぶのは遠い仕草。一度も色褪せたことのない、春の暮れの飼育小屋。

あいつ自身がどう思っているかは知らないけれど、少なくともあの瞬間、おれにとって、あいつは誰よりいい女だった。

「くうーっ。やっぱりいい女なんじゃねえか、ちくしゅう！どっとうしてこうお前の周りにや、いい女ばっかり集まるようにできてやがるんだ！」

何が気に障ったのか、さっきまで直っていた先輩の機嫌が急速に悪化して、拳骨で思いきり頭を殴られる。はつきり言って、目から火花が散るぐらい痛い。

「知りませんよ。だからって、おれにあたらないでくださいよ」

「ばっかやろう！お前にあたらないきゃ誰にあたれっというんだ、こんちくしょう！ちったあ女に振られるぐらいの痛い目みてみろってんだ！」

ゴム長で背中を蹴飛ばしながら大声でわめく先輩に、周りからざわざわ視線が集まってくる。勘弁してほしい。せつかく丸く収まったと思ったのに。

口答えせず、なんとか突っ転ばされないようにやりすこしながら、後で店で待ち構えている恋人をどう説得したものかと、痛む頭を悩ませた。

初めてあいつを見たのは中学一年の春だった。

その頃おれは仲良くしていた幼馴染の外村晴樹、

通称ハルトと、入学式で声をかけられ付き合ひ始めたばかりの彼女がちょうど隣のクラスにいて、体育の授業なんかもよく合同でやってたから、休み時間、ちよくちよくそっちに出入りしていた。

三階建ての校舎の一番上に位置する一年生の教室はどれもみんな同じ間取りで、隣に移ったからといって、特にこれといった差があるわけではなかったけど、自分の二組の教室とは違い、隣の三組の教室

は、通りに面した窓から校舎の隅に生えている大きな桜の木が見えた。

教室の入り口。ドアを開けてすぐのところにある、幼馴染の机に腰かけて、他の友達も交えながら雑談に花を咲かせていて。

そのとき、初めてあいつを見た。

肩口くらいまでの黒い髪。紺のイートンジャケットに、学校指定の白いブラウス。赤いリボンと紺のスカート。

まだ真新しい、周りの女子と同じ制服に身を包み、黒板に向かって左端の列、真ん中窓際の席で、そいつは机の上に葉を挟んで閉じた本を置いたまま、窓の外に広がる空と、ざわざわと風に揺れている桜の枝を眺めていた。

何か目的があるというふうではなく。かといって、ぼうっとしているわけでもない。

ただ淡々とした感情の薄い表情で、彼女はよく晴れた春の明るい空と、風に舞い散る桜の花を見つめていた。

「どうしたの？」

余所見していることを不思議に思った彼女の声に引き戻されて、なんでもないと首を振る。よその女に見とれていたなんて言った日には、ひどく機嫌を損ねてしまうと、短い間に知ってたから。

その次、また隣のクラスを訪ねたとき、そいつはやっぱり机の上に本を置いたまま、一人で空を眺めていた。前と同じ本だったけど、挟んだ葉の位置が移

動していて、前より読み進んだことを示していた。

そんなことを繰り返して、そいつがいつ見ても、同じ場所に座って空を見ていること。そしていつ眺めても、一度も笑っていないこと。その二つに気がついた。

「なあ。あいつ、何ていうの？」

一学期の中頃。体育のマラソンで女子が校庭を走っている間、先に終わって一緒に一休みしていたハルに、それとなく一度訊いてみた。

「あいつって？」

「ほら。今ちょうどサッカーゴールの前抜けた女子。いつも窓際座って、机に本置いてじーっと窓の外見てるやつ」

その表現で話を通じたのか、ああ、とハルは頷いて、体操服で走る少女の一人に目をやった。

「行方だよ、行方。あれだろ？あの瀬戸と相沢の間走ってる。何？お前あいつがどうかしたの？」

「別に。いつ見ても同じとこで同じことしてるから、なんとなく気になっただけ。それよりあいつ、行方っていつのっ？」

「変な苗字だろ？行方って書いて『ゆきがた』だもんな。お前の苗字も割と変わってるっちゃ変わってるけど、あいつほどじゃないもんな」

「まあ、面白いつちゃ面白い名前だけど。あいつ、いつもあんななの？」

あんなというのをどういう意味に取ったかはわからないけど、ハルは訳知り顔で首を縦に振る。

「まあな。いつ見てもあんな感じだよ。怖いっていわけじゃないんだけどさ、とにかく愛想ないんだよ。にことも笑わねえし。自分からこっちにもよってこねえし。ポーカーフェイスつうわけじゃなくて、単に笑わないだけなんだけとさー」

もう少し笑えば、ちっとは可愛げあるんだけどなあ。そんなことを言いながら、体操服を襟をはだけて熱を逃がす。幼馴染のそんな感想を聞きながら、手の甲で額の汗を拭う。

笑わない。一学期が始まって一月余り経ち、そう形容されている少女の名前を、おれはそのとき初めて知った。

行方と實際口をきいたのは、もう少し後のことだった。

きっかけはある日の国語の授業。いわゆる読書感想というやつで、担任の国語の教師が、自分が今まで読んだ本の中で一番面白いと思ったものについて

の感想を、原稿用紙二枚か三枚程度にまとめてこいというもので、忙しさにかまけてほったらかしているうちに、あつというまに提出期限が来てしまい、

気がついたら週末を挟んで後三日に迫っていた。毎週金曜はバスケット部の練習で、それが終わる頃には図書室はもう閉まっているから、何か本を借りるなら、昼休みがぎりぎりのデッドラインだった。

学校ではなく市営の図書館まで行けばまだ大丈夫なのかもしれないけど、自分の家からは少し遠い

し、何より宿題用の本一冊借りるためだけにそこまで苦勞するのはごめんだった。

昼食を済ませ、いつもより早めに雑談を切り上げ、階段を下りて、一階の図書室に足を踏み入れると、しんと静まりかえったそこには、他に誰もいなかった。

「あれ」

時間を間違えただろうか。そう思って時計を見ると、まだ昼休みの途中で、ちゃんと開館時間と重なっているし、鍵の開いたドアにも何故か英語で『OPEN』の札が下がっている。

その割にはひっそりしていて、カウンターにも司書はおろか、図書委員さえ一人もいない。

まいったな。そう思ったものの、誰もいなかったら仕方ない。適当なエリアにあたりをつけて、目的の本を探し出す。

目当てのものは随分昔に読み聞かされた外国の昔話のようなもので、かといって、そんなに子供向けだったり、大昔のストーリーというわけじゃなく、割と現代的で有名な作品らしいので、たぶんここにもあるだろうし、感想を書くなればそれにしようと思っただけで、いかんせん作者も本の題名も覚えていないから、やみくもに本棚に手をつ込んでそれらしい本のページを開いて、話の内容を確認するという作業になるため、効率が悪いことこの上ない。

いつもカウンターに座っている丸眼鏡をかけた初

老の司書のおっさんなら、たぶんこんな面倒くさいことしなくても、もっと簡単に見つけれられるはずなのに。

そんなことを思いながら探していると、段々時間が残り少なくなってきた、残り十分を切ろうとしているところで、部屋の奥にある古そうな棚に向かったら。

図書室の隅。本棚と壁のその隙間で、見覚えのある少女が一人、スカートのまま、膝を抱えて眠っていた。

行方。幼馴染から聞いた少女の名前が浮かぶ。そういえば、今日彼女に声をかけられたとき、開いたドアからのぞく隣の教室にこいつの姿はなく、代わりにその机の上に、違うクラスの男子が座っていたことを思い出す。

いつもの定位置を追いやられ、ここに避難でもしていたのだろうか。

声と物音に目を覚ましたのか、俯いていた顔を上げ、ゆっくり瞼を開いてこっちを見る。初めて間近で見るその顔は、昼寝から起きた猫の子を思わせる、幼く無邪気なものだった。

「あ、ごめん」

静かに眠っていた人間を起こしてしまったばつの悪さに頭を下げる。と、そのまま無防備に開いたスカートの中が見えそうになって、慌てて顔を逸らしてしまう。

いや。確かにこんなとこ誰も来ないと思うけど。そ

れでもスカートのまま体育座りなんてするもんじやない。思わず口を突きかけた台詞をぐっと押し込める。

「……………なに？」

相手はまだ少し眠たげな目を瞬かせて、小さくあくびをしながら問いかける。起こされたことより、どうしておれがここにいるのかを尋ねているらしいか。

「ちよつと本探してて。向こうで訊こうと思ったんだけど、なんか今、誰もいなくてさ」

そのままの足とスカートを必死に視界の隅に追いやりながら、傍から見たら間抜けな様子だとは思いつつも、ずらりと並ぶ年代物の辞典の背表紙を見つめ、自分の状況を説明する。

実際、図書委員はともかく、司書のおっさんまでいないのはちよつと困る。元々そんなに広い図書室じゃないけど、それでも係が誰もいないというのは無用心だし、体裁が悪いし、どこに何が置いてあるのかわかりにくい。

「どんな本？」

「……………ん」と。確か外国の話で、女が自分の髪切つて、男が自分の時計売つて、お互いプレゼント買う話」

かなりアバウトな説明に黙って耳を傾けて、数秒考えた後、少女は身を起こして立ち上がり、スカートの埃を払ってから、くるりと背を向け歩き出した。

彼女は確かな足取りで本棚の列の間を抜け、十歩分歩いたところで止まり、自分の背の高さより頭一つ分下の段に手を突っ込み、O・ヘンリー短編集と書かれた、白表紙に時計と金貨の絵が描かれた薄めの本を手渡した。

「たぶんこれだと思っただけ。一応、中身確認して」

渡された本のページをめくる。舞台は一九〇〇年代アメリカ。ニューヨークの片隅。若く貧しい夫婦が互いの贈り物を買うために、大事な宝物をそれぞれ売り払う話。

「ああ、これ。うん。たぶん間違いない」

おぼろげな記憶と話のあらずじが一致する。少女はこくりと頷くと、そのまま無人のカウンターに向かい、ついてくるように目で訴える。

ついていくと、カウンターの向こうに回った彼女は朱肉とスタンプを取り出し、本からカードを抜き取り、こっちに記入するようにとペンと一緒に差し出しながら、スタンプの日付の目盛りを確認した。

「お前、図書委員なの？」

手馴れた仕事ぶりのよさに尋ねてみる。

「ううん。違うよ」

と、あっさり首を横に振り、少女は手際よくカードにスタンプを押していく。

……………いいの。それで勝手に貸し出して。いや、実際ものすくく助かるんだけど。

「いいの？貸してもらって」

「うん。時間外だったり、誰も手が空いてないときは

勝手にしてもいいって、この前そう言われたから」

自分以外の人にしたのは、初めてだけど。そんなことを付け足して、彼女はとんとんと揃えたカードをそれぞれのケースにしまった。

「ありがと。助かった」

借りた本を手に礼を言う。昼休みが終わるまで後五分。これで締め切りには、どうやらぎりぎり間に合いそうだ。

「おれ、向原。向原一人。お前、名前なんていうの？」

それは、本当にただの気紛れだった。

自分から名前を名乗るのも。相手の名前を尋ねるのも。どうしてか、大抵人にされてからだったのに。

そのときおれは自分から、彼女に名前を尋ねていた。

「ゆきがた」

使った道具を片付けながら。ニメートル先、半分開いたドアの前に立つおれを見て。

「行方真岐だよ。向原くん」

まるで少年のような口調で、行方真岐はそう名

乗った。

それから何年か後の話。当時のことを尋ねてみると、あの頃の行方は、自分が女であるということ、たまらなく嫌がっていたということだった。

「男の子になりたかったとか、性同一性障害とか、そういうのじゃないよ。ただ、女の子の自分が、どうしようもなく嫌だっただけ」

携帯電話の受話器越し。相変わらず起伏の少ない、透明で穏やかな声で、行方はそんなことを言う。

「小学校の頃は、男の子でも女の子でも、人それぞれ違いはあっても、みんな、同じようなものだったでしょう。制服なんてなかったし、お行儀よくするように言われても、女の子らしくしろ、ってそんなにたくさん言われなかった。でも、中学生になって、制服でスカートはくようになってから、女の子は女の子、男の子は男の子って、はっきり区別されるようになって。もう中学生なんだから、女の子らしくしなさいって、何度も言われるようになった」

誰に言われたのかは告げないまま、行方はそのまま言葉を続けていく。

「自分は女の子だってわかってたし、女の子が好きなわけでも、男の子が嫌いなわけでもなかったけど。でも、スカート無理やりはかされるのは嫌だった」

「なんで？」

「わたし、スカート似合わなかったから」

「そんなことねえよ。お前、すっごく似合ってたぜ。脚細いし。色白くて肌きれいだし。全然知らないみたいだけど、うちのクラスの男子、結構お前のこと

そういう目で見てる連中多かっただって気づいてた？」

「本当？」

「ほんとほんと」

ちなみに自分もその一人だったということは伏せておく。別に隠すことでもないのだが、あの連中と同類扱いされてしまうのは勘弁してほしかったから。

「趣味悪いんだね。その人達」

「だから、そういうこと言うなって。お前見た目は悪くないんだから、もうちよつと自信持ってって何回言ったらわかるんだよ」

「向原くんは優しいから」

「お前な。おれ、そのうち本気で怒るぞ」

受話器の向こうからくすくすと、喉が微かに震える音がする。

「笑うんなら切るぞ」

「ごめんごめん。そういうつもりじゃなかったんだけど。向原くん、本当、変わらないなあって」

「それはお互いさまだっつーの。ったく。お前って本当、性格悪いやつだよな」

「ひどいな。これでも、少しは頑張ってるつもりなんだけど」

「頑張るところが違うっての。お前は自分を磨くんじゃなくて、自分を好きになるように頑張れって

うの」

その言葉には応えずに、行方は静かに笑いの名残を収めていた。

「やっぱり、向原くんは変わらないね」

「お前もな。で、なに。つまりお前は無理やりスカートはかされたり、女の子らしくしろって言われるのが嫌で、初めて会ったとき、あんな男っぽいしゃべり方してたわけ？」

「別に男っぽくしようとしてたわけじゃないんだけど……ああ、でも」

ふと、思い出したように。

「わたしは女の人になることが、どうしようもなくこわかった」

あいつはぼつりと、そんなことを口にした。

何の感情も感慨もない、ただ、零れ落ちただけの言葉。

そうか、と小さく頷いて。それ以上、先を促すことはしなかった。

あいつがそんなふうと言うことは、それはきつと、本当にこわかったということだから。

そんなわけで、少し変わっていて、とつつきにくくて、どちらかというと人付き合いを避ける傾向があったから、行方は他の女子に馴染まず、かといって、

男子と仲良くしているわけでもなく、どちらかというと中立で、いてもいなくても同じ、必要なとき以外は空気のような存在であることをむしろ好んでいるようで、クラスの中でもそれが容認されていた。

いじめられていたわけじゃない。確かに風変わりではあったけど、行方はごくおとなしく、誰かの側に立つこともなければ、誰かに敵対したり、害を成したりするようなこともせず、何か頼みことをされれば大抵黙って引き受けたし、成績もそう悪くなく、運動神経が格別鈍いわけでもなかったから、授業でペアやグループを組むときも、それほど嫌がられたりはしなかった。

それに本人はどう思っていたかは知らないけど、あいつはそれほど見た目も悪くなかったから、男子から特別敵視されることもなく、かといってそれを鼻にかけたり、男子に媚を売ったりするようなこともなかったから、女子から目に見えて疎外されたり、虐げられることもなかったのだ。

学年が変わり、同じクラスになって、同じ教室で過ごすたび、いつも不思議に思っていた。交わろうと思えば、いくらでも交われるのに。みんなのことを嫌っているようなわけでもないのに。どうして、あいつは人を避けるのだろう。

敵を作らないかわりに、誰も味方を作らない。誰かに突き落とされなにかかわりに、自分から落ちてしまっても、誰も助けてくれはしない。

そんな、塀の上を一人で渡るような生活を、あいつはずっと続けていた。

それは口にはしないだけで、大なり小なり、たぶんみんなが思っていたことで、そう思っているだけで、誰も口にはしないことだった。

そんな状況が変わったのは、中学二年。家庭科の授業でやった、その後、悪夢と語り継がれることになる、ある調理実習のときだった。

その日のメニューはお好み焼きで、別に広島風とかそういう凝ったものじゃなく、具を刻んで混ぜ合わせてお玉でひとまとめにすくって焼く、ごく普通のものであった。

真面目に作ってあげれば多少の味の差はともかく、まず失敗しない料理。無難でまともでスタンダードな、その日の昼食になるはずだったそれを、たった一グループ、ものの見事に失敗させたやつがいた。

行方じゃない。正確には行方がいたグループの男子が、四人分のタネをフライパンに広げて一気に火にかけて後、他のグループの連中とのおしゃべりに夢中になっていて、その結果、四人分の昼飯を見ても無残な代物に変貌させてしまいがったのである。

その酷さは、はつきり言っても筆舌に尽くし難い。

もつとはつきり言ってしまうえば、そうなる前に誰か

気づくか止めるかできなかったのかと言いたくなるくらい凄まじく焦げまくっていて、しかも途中でひっくり返そうとして失敗したのか、円形じゃなく出来損ないのスクランブルエッグ状になっていて、そのぐちゃぐちゃの固まりに墨だか野菜の残骸だがよくわからないものがところどころ混じっているという、およそ人間の食べるものとは思えない状態を呈していた。

……上野公園やガード下のホームレスだって、よっぽど腹減つてない限り、絶対あんなものに口つけないぞ。

誰もがそう思ったのか調理室の中にはなんとも言えない空気が漂って、肝心の責任者というか張本人は同じグループの女子と男子からこっぴどく罵声を浴びせられていた。

行方一人を除いては。

大皿の上に盛られた、とてもお好み焼きとは呼ぶことのできない代物をしばらくじっと見つめた後、行方はテーブルの端に置かれていた小皿を一枚抜き取って、備え付けのスプーンに手を伸ばす。

その仕草にそれまでわめていたグループの連中が、びたっと動きを止めていた。

行方は黙って大皿の残骸をきれいにスプーンで四つに分け、そのひとつかたまり分を自分の小皿に取り分けると、持参した箸を取り出した。

その行動に、グループだけではなく、他の連中までも思わず目を疑った。

まさか食べる気なのか。あれ。

不気味な静寂が訪れる。生徒どころか、家庭科の教師まで言葉を失っていて、斜め向かい、調理室の反対側のテーブルにいたおれも、絶句してそれを見つめていた。

おいおい大丈夫か。あれ間違いなく絶対保証付き、発癌性物質でんご盛り。おいしいものが身体にいいとするなら100%健康には最悪で、栄養どころか小麦粉と炭の固まりこねくりまわしたような代物だぞ。

硬直している周りをよそに、行方は皿の上に盛られたそれを、ためらうことなく口に入れた。

ひっ、と誰かが小さな悲鳴を上げる。無理もない。まともな人間なら、食べるどころか近づくことすら避けるそれを咀嚼して、行方はこくりと飲み込んだ。

じっと反応を見守る六十個近い目玉に囲まれて、行方は表情はおろか眉一つ動かすこともなく、次の箸を皿へと伸ばす。そして無言でそれを繰り返す。

ものを食べるという行為だけで、人間ここまで人を脅かすことができるのか。

驚愕を通り越して恐怖のどん底に叩き込まれている周囲の視線などどこ吹く風か、行方は一言も何も言わず、ただもくもくと器用に箸を進めている。

そんな空気に、耐えられなくなったからだろうか。

「なあ」

おれはつかつかと行方のテーブルに歩み寄り、周りが硬直している中、その目の前で立ち止まると、思わず口を開いて尋ねていた。

「それ、一口もらっぺいい？」

調理室の空気が一瞬で、びきっと音を立てて凍りついた。

一体こいつは何を言ってるんだと、言葉にされなくても痛いぐらい突き刺さってくる無言の視線を背中に一身に浴びていると、行方はきょとんとしたように、瞳を丸く見開いて、こっちのこを見つめていた。

いいの？と見ようによってはそう伺っているようにも取れる表情に、黙ってこくりと頷き返す。

ほんの少し迷うような間を置いた後、行方は棚から備え付けのスプーンをもう一つ取り出して、一度きれいに洗って拭いてから、おれに向かって差し出した。でっかいテーブルスプーンではなく、一回り小さなデザートスプーンだというのが、こいつなりの気遣いなのかと考える。

「……じゃ、いただきます」

一応、きちんとことわってから、受け取ったスプーンをかたまりに突き入れすくい上げる。

比較的まだまともそうな箇所を狙って取ったつもりだけど、間近で改めて見るとその凄まじさに思わず顔をしかめそうになって、それをなんとか押さえ

つける。

「こちやこちや言うな。何も考えずに飲み下せ。」

部屋中の視線を無視し、自分自身に活を入れ、スプーンにのった一口分のそれを一気に口の中へと放り込む。

「っー」

その瞬間、声を出すのは、辛うじて全力で我慢した。

「……これは最早料理なんかじゃない。それ以前に人間の食べる物じゃない。」

こいつはこんなおぞましい代物を出されて怒ることもなく、平然と食ってやがったのか。しかも淡々と食い続けてやがったのか。もしこれを作ったのがおれの班のやつだったら、おれは間違いなくそいつのことを力の限り殴っている。

スプーンを握り締めたままがちに固まったおれの姿に、ほとんど無表情に近いやつの顔が微妙に変わり、大丈夫か？と尋ねるように、なんだか心配そうに眉を寄せて、こっちの顔を見上げていた。

耐えろ。ここでもどしたりしたら、おれは何か決定的なものに負けてしまう。

全身全霊で口の中のものを咀嚼し、喉の奥へと嚥下する。

「サンキュー。こちそうさま」

口が空になったことを確かめてから、小さく頷い

て礼を言う。

「……うん。どうも」

と短く返し、あいつは血を引っ込めて、再び食事に取りかかった。寄せられていた眉は元に戻り、感情の乏しい表情で、また涼しげに人外のものを食べ始める。

おれは使ったスプーンを洗って、きちんとあいつに返してから、自分の席へ帰ろうと歩き出す。

部屋の真ん中を通る途中、がやがやざわめく連中の誰かが勇者だと言っていたのが聞こえた。

あれを食べれば勇者になれるというのなら、おれは一生物人Aのままがいい。

思わずそう言いたくなったが、喉元までこみ上げる強烈な吐き気と、身体が有害物質に対して巻き起している、けいれんしそうな拒否反応を抑えつけるのに精一杯で、とても口を開く気になてなれなかった。

「すごいなー、お前。で、あれ一体どんな味だった？」

その後の放課後。バスケット部の外練で校舎の周りを走っていると、隣に並ぶハルが話しかけてきた。

「……まあ、食えないことは、なかったかな」

マジ最悪。ありえねえ。あんな人間の食い物じゃない。もう少しで口から出かかった感想を全力で腹の底に押さえ込む。それを口に出したら死ぬ気であれを飲み下して消化した苦労が、全部一瞬で

無駄になる。

「そうかあ？あれどっから見ても、まともな食い物じゃなかったぞ？お前よくあんなもん、一口でも試す気になったよな」

ああ。お前はものすごく正しいよ。後悔するようなことはできるだけやらない主義だけど、あれを口に入れたあの一瞬だけは主義も主張も引っ下げて、本気で後悔しそうになった。

「なんにしてもお前ってほんとすごいよ。女子は信じられないって騒いでたけど、おれはある意味お前を尊敬する。あんなの誰も真似できねーよ」

「行方のやつは一人分全部まるまる食って、思いつきり平気な顔してたけどな」

ていうかあれを完食してトイレにも駆け込まないあいつの味覚と消化器官は一体どうなってやがるんだ。胃袋とか鋼でできてるんじゃないだろうか。少しでもまともな人間ならまず身体が拒絶するぞ、あんなもん。

「……まあ、なんていうか、おれはたぶん例外だろ。ていうかむしろ化けもんだ。おれお前はすごいって思ったけど、あいつはマジで全身鳥肌立ったもん」

思い出したらまた気持ち悪くなったのか、走るベースを落としてハルはぶるぶると身体を震わせる。あれじゃあほとんどホラーだと、その顔が何よりも雄弁に物語っている。

「考えすぎだよ。言ったら、一応食えないことない味

だったって。そりゃ正直見た目は最悪だったけど、別に死ぬほどのもんじゃないし。他に昼飯なかったし、もったいないから、我慢して食っただけじゃないの」
交差点の信号を横目に、残り一周半になったことを確認しながら、そのままのペースを保って走る。スパートをかけるのはラスト一周になってから。そう思い、腕時計で今のタイムを見ようとしたら。

「そんなこと言えんの、お前だけだよ。お前知ってるか？あの後、みんながなんて言ってたか。向原はいいやつかもしれないけど、行方は人の心がまともにならないやつだから、あんなひどいもの食べさせられても、なんとも思わないんだって」

ハルが続けたその言葉に、時計を巻いた左手首がびくりと揺れた。

「なんだよそれ。いくらなんでも、ちょっと言いすぎじゃねえ？」

確かにあのあいつの食べ方は化物と言われても仕方ないかもしれないが、それにしただってハルの今の言い方はあまりにも悪意が感じられた。

「おれが言ったわけじゃねえよ。他のやつ」

「他って、誰が」

「いちいち誰とか、見てないって。あーでも、ぱっと見言ってたのは山瀬とか岡村とか、谷口とか。あと、中森あたりも言ってたかな」

女子と男子が半々ぐらいの割合の面子に、フライ

パンをほったらかして焦がしてしまった中森の名前が混じっていることがわかった。

あのお好み焼き台無しにしたの、他でもないお前のせいじゃねえのかよ。

笑いながら、あんなのおれでも食えないって、と、へらへら笑いながら言う中森の姿が容易に想像できて、なんだか気分が悪くなる。

「まあ確かに言いすぎだとは思うけど。でもおれ、なんとなくわかるよ。だってあいつ時々、こっちの言葉通じてるのか微妙なことあるし、一体何考えてんのか、本当に全然わかんねえもん」

一年の頃から行方のことを知っている幼馴染。なんの悪意も善意もなく、本当に、ただ純粹に、わからないと心の底から呟くそれを、初めて、どこか冷めた気持ちで見つめていた。

「悪い。おれ、先行くわ」

え、というハルの言葉を無視して、予定よりほんの少し早くスパートをかける。後で息が上がるかもしれないけども、そんなこと何も構わずに、ぐんぐんスピードを上げていく。

大丈夫？

声には出さず、けど、確かにそう訊いていた、冗談でもからかいなどでもなく、純粹に自分を心配して

いた目。

ハルの言葉と、行方の視線を思い返ししながら、本当に人の心がわからないやつはあんな目をしないと、おれは、そう思っていた。

それからだろうか。みんながあいつを見る視線に、時折、露骨な奇異の眼差しや、悪意のそれが混じるようになったのは。

あいつと同じクラスになって二年目の、中学三年。期末テストが終わり、帰るだけになった夏の午後。

他の人間が出払って、後は自分達だけになった教室に残った男数人、まとめた荷物を持って余しながらなんとなく雑談していると、いつの間にか、話はクラスの女子のことに移っていた。

「だーからー、片山より篠丘の方が絶対かわいいって。あの二重がぱっちりしてるとことかさー」

「目はぱっちりしてるかもしれないけど、ちょっと化粧げばくねえ？顎とか、なーんかぼっちゃりしてるしさ」

「化粧はともかく、下唇厚い女って実際はキスしたとき気持ちいいって話だぜ。それにあんまがりがりだと、他のとーも肉が薄いっていうか」

「お前巨乳好きだもんなー。いっそホルスタインでも捕まえてくりやいのに」

「ため、ひっでーこと言ってるじゃねーよ！おれは単に一般論言ってるってだけで」

「……やめろよ」

そういう冗談、面白くねえよ。ぼそりと。気がついたらそう言っていた。

固まる空気。途切れた談笑。こっちを向いた同級生と飯塚をしろりと一瞥する。

「なんだよ、いきなり。どうしたんだよ」

「どうしたもこうしたもねえだろ。そういう冗談、言ったりするなって言っただよ」

軽く受け流そうとする飯塚に、もっとはつきり繰り返す。

飯塚やまだ状況が飲み込めていない他のクラスの連中と違い、ハルは全く笑っていない。それどころか、もっと早く止めるべきだったと、思いきり顔をしかめていた。おれがこういうものの言い方をするとき、本気で怒っているのだと、こいつはよくわかっているからだ。

いつもならこんなことはしない。たとえクラスや部活の連中が馬鹿なことを言ったとしても、馬鹿だと呆れた声を出すか、くだらないと無視するだけだ。

けどそのとき、おれは無性に腹が立っていた。

「なにマジで切れたんだよ。わかかんねえの。こんなの、ただのジョーダンじゃん」

本気で怒っているのが伝わったのか、飯塚の声か

らもそれまでの気軽さが引いていく。それには応えず、ただ冷やかに睨んでいると、いつしか、周りも静まり返っていた。

もしあいつがこの話を聞いてたら、どんな顔をするんだらう。

ふと、そんなことが頭をよぎる。

放課後、委員会の仕事の帰り。夏の午後。外から差し込む陽射しを浴びる白いブラウス。紺のスカートから伸びる、白魚のようなと言われた細い脚。無人の廊下。教室の前で一人佇む、あいつの姿を想像する。

ドアを一枚隔てた向こう。歪んだ劣情。猥雑な笑い。男の醜い下卑た声。

たとえそれを聞かされても、あいつは感情のほとんど映らないあの瞳で、何も聞いてなかったように、黙ってその場を去るんだらう。卑猥な欲望に汚されても、何も感じていないみたいに、表情一つ変えることはないんだらう。

どうしてか、それが無性にむかついた。

「切れんなって言っただらう。なんでそんな睨まれたりしなきゃいけないんだよ。全然、わけわかかんねえ」
「わからなくていいから黙れって言っただよ。それともお前、いちいち理由がわからなきゃ、口閉じることできないのか？」

「おー、怖え。あ、なに？もしかして、お前あいつのこと好きだった？なんか時々、話しかけたりしていたし。それとも、実はあいつで抜いてたとか」

「てめえといつしよにするな。お前と違って、おれはそういうことする相手ならとくにいるんだよ」

「言ってるよ。どうせ適当に遊んでるだけだろ。お前だって本当は同類のくせに、一人だけえらそうにしてんよ」

一人すました顔をするなど飯塚は歯をむき出して嘲笑う。十四歳と十五歳。雄という同類の一括り。誰もが通る若気の至り。こんなくだらない話、何も珍しくなんか無い。

ああそうだよ。おれもお前も同じ劣情を胸に抱える一人の男にしか過ぎない。

けど、それでも。理由もなく女を笑って貶めるようなやつは、人間として最悪だ。

だから何を勘違いしているのか、下卑た笑みを顔に貼り付け汚い言葉を続けるそいつに、ありったけの軽蔑と侮蔑を込めて言い捨てた。

「ほざけ。女泣かせるような妄想しかできないやつが、いつちよ前に盛ってんじゃねえよ」

途端に、飯塚の顔がさつと赤くなる。さすがに侮辱されたと思ったのか、さっきまで薄ら笑いを浮かべていたそれが見るみる歪んで振れていく。

「てっ、めえ！」

飯塚が顔を真っ赤にして、胸倉を掴もうと手を伸ばす。飛びかかろうとしてくるそいつを前に身体を傾け、止めようと動きかけるハルを無視して、こっちも右手に力を込める。

殴りかかってくるなら、上等だ。

売られた喧嘩をその場で買おうと、固めた拳を振り上げようとしたその瞬間。

「きゃっ！」

がたん、と何かがぶつかり倒れる音がした。反射的にその場の動きが止まり、皆が同じ方向を凝視する。

「榎本」

開いたドア。落ちた靴と倒れた椅子。半開きになった扉のその前で、同じクラスの榎本加奈子が、凍りついたように立っていた。

掴みかかろうと伸ばした手と、飛びかかろうとしていた身体が中途半端に宙で止まる。榎本は、ドアの枠にもたれるように身体を支え、怯えたような目でこちらを眺めながら、薄く開いた唇をわなわなと震わせていた。

飯塚を含めた何人かが、しまったとでもいうように急速に顔を強ばらせる。当然だろう。あんな話聞かれていたら、軽蔑されるところじゃない。

「加奈ー。どうしたの？」

「忘れ物なら早くしなよ。ぼーっとしてたら置いてくよ」

廊下に足音が響き、少しずつ、けど確実に人が集まってくる。

中学三年のこの時期、いくらクラスの中とはいえ、乱闘騒ぎなんて起こしたら、まず間違いなく自分の内申に傷が付く。

傷つけられたブライドと内申書とを秤にかけ、そ

ちの方が勝ったのか、飯塚が胸倉を掴もうと伸ばしていた手をゆっくり戻す。それを見届けるのと同じ時に、おれも握り締めていた拳を下ろして、自分の荷物を手に取った。

開け放されたドアの前。床に落ちてた靴を拾い上げ、それを渡して、まだ固まって震えている榎本の肩をぼんと叩いて、慰めるように声をかける。

「忘れ物あるんだろ。早く取れよ。でないと、置いて行かれるぜ」

肩から力が僅かに緩むのを確認して、小さく笑いかけてから、するりと横をすり抜けた。

前から女子が数人ばたばた走り、教室の前で立ち尽くしている榎本のことを追いかけた。それ以上、後ろを振り返ることもなく、上履きをさっさと履き替えて、ぎらぎらと強い陽射しの下へと一人歩き出す。

試験の終わり。校舎の中と校門の外。下校していく人ごみの中に、行方の姿は最後まで見つけれなかった。

おれの家は祖父と父との三人暮らしで、祖母はおれが生まれる前、母はおれが六つのときに他界した。

母は優しい人だった。病弱でおれを産んでから、何度も入院を繰り返し、かまってもらった時間より、床で臥せている時間のほうが長いような身体

だったけど、それでもとても優しく、具合のいいとき、おれを傍に呼んでは、いろんな絵本を読み聞かせてくれた。

あまりにも普通過ぎて、読んでもらった話の中身は、ほとんど忘れてしまったけど、本を読み聞かせる母さんの穏やかで落ち着いた声は、とてもきれいで心地いいと思っていた。

そんな時間が続いてくれたのは、四歳になる手前まで。それから母さんの身体は、よくなったり悪くなったりを何度も繰り返しようになり、頻繁に病院に通い詰めた。

それが単に身体の具合だけでなく、もう一人、子供を作ろうとしているせいなのだと思ったのは、父さんが母さんに二人目は諦めたほうがいいと、そう言っているのが聞こえたときだった。

かあさんは、子供がおれ一人だといやなんだ。

父さんの言葉に決して頷こうとせず、どうしても二人目を産みたいと、閉ざされたガラス障子の向こうで首を振り続けている母さんの声を、どこかさびしく感じていた。

そうしてようやく、妹ができたとき、本当にうれしそうに聞かされたときも、自分は男の子で、母さんは女の子のほうがよかったから、ずっと二人目がほしかったのだと、そういうふうにも思っていて、素直に母さんに向かって喜ぶことができなかった。

妹が生まれてきたら自分はもう、母さんにはいない子供になってしまうのかと、そんなことを考えて。そう思うと、なんで喜ばないのかと、父さんにそう責められても、日に日に少しずつ大きくなっていく腹を、母さんがうれしそうにさすっついても。どうしても、笑っておめでとくと言えなかった。そして皆うれしそうにしてるのに、一人だけ喜ぶことができないう自分のことが、どうしようもなく嫌だった。

だから夜中、急に家がすごい大騒ぎになって、母さんが病院に担ぎ込まれたとき。

自分が悪い子だったからバチが当たってしまったのだと、本気でそう信じていて。

もう一人だけ喜ばないでいたりしないから、どうか何事も起こらないようにと、一晩中、一睡もできずに、手術室の前、病院の廊下で祈っていた。

それからどれほど待っただろう。手術中の赤いランプが消え、ストレッチャーに乗って出てきた母さんの顔は真っ白で、医者とおほしき人がおれの頭にほんと手を置いて、お母さんは大丈夫だと教えてくれた。

父さんといちちゃんが何度も頭を下げる横で、先生と呼ばれたその人が、二人に何かとても難しいことを話しているのを聞きながら。おれは手術着に包まれて眠る母さんと、小さくなってしまったその腹を、食い入るように見つめていた。

翌朝、父さんに連れられて病室に入ると、母さんは疲れた表情で、それでも笑みを浮かべて、おれ達のことを迎えてくれた。

心配かけちゃってごめんね。もう、大丈夫だから。母さんはそう言っておれの頭を撫でて、父さんはそんな母さんのことを氣遣わしげに見つめていた。なにか、欲しいものがあるか。そう尋ねた父さんに、母さんは喉が渴いたから、何か冷たい飲み物を買ってきてほしいと言い、父さんは一つ頷いて、そのまま病室を後にした。

かあさん。

父さんがいなくなってから。ずっと思っていたことを訊いた。

おなか、どうしたの？

それまで膨らんでいたはずの腹が萎み、元と同じ大きさに戻っていること。

生まれてくるはずだった赤ん坊が、部屋のどこにもいないこと。

それをひどく不思議に思っただけなら、母さんは一瞬間を強ばらせて、それから、寂しそうに笑っていた。

赤ちゃん、いなくなっちゃったの。

静かに告げられた言葉の意味を、すぐに理解することができなくて。ぱちりと、目を大きく開いたまま、そう答えた母さんの顔をじっと見上げていた。

どうしても産みたいと、妹ができたと言いながら、いつもうれしそうに撫でさすっていた丸い腹。それが突然なくなってしまったこと。母さんが、とてもさびしそうに笑うこと。一つ一つ、飲み込むように、母さんの顔を凝視して。

そしていきなり、母さんはおれのことを抱きしめて、涙ながらに謝った。

ごめんね。なんにもしてあげられなくて、ごめんね。

白い寝巻き。細くやつれた腕を身体に回して、ぼろぼろ涙を零しながら、母さんは何度も何度も、ごめんなさいと繰り返した。なんにもしてやれなくてすまないと、そう言いながら謝った。

いつか必ずおれを遺して逝ってしまうその代わりに、せめてたった一人でもきょうだいを作ってやりたかったのだと、母さんはそう泣き崩れた。

かあさん。おれ、大丈夫だから。おれならちゃんと、一人でも生きていけるから。

どうして謝られるのかわからなかった。どうして

母さんが泣き崩れないといけないのか、なんで自分にこめんさいと言っているのか、そんなの、全然わからなかった。

それでも、自分はいらない子供なんかじゃなかったこと。母さんをひどく悲しませていること。母さんがずっと、自分を想ってくれてたこと。それが、ものすごくよくわかったから、自分は一人でも平気だと、一人だけでも生きていけると、ただそれだけを伝えたかった。

そう伝えて、母さんを安心させたかったけど、それはついに叶わなかった。

一人。お前は、女を幸せにできる男になれ。

妹が死んだ一年後。その後の経過がよくなかった上に、肺を悪くして死んだ母さんの葬儀の後。遺骨を抱えて、家へと帰る車の中で、歯を食いしばり、涙をこらえていたおれに、隣に座っていた祖父は静かにそう言った。

産まれてこられなかった妹と、生き長らえることのできなかつた母。その二人を後ろにおれはこうして生きている。

だからせつかく産まれてきたのなら楽しく生きなきゃ損だと思っただし、女は幸せにならなきゃ嘘だと思っていた。

あいつ、どうして笑わないんだろう。

行方を見て、一番最初に思ったことはそれだった。

無表情というわけではない。ただ淡々としているだけで、何かおかしなことを訊かれたときは、まるで幼い子供みたいにきよんとしていたし、無茶な頼みをされたときは困ったように眉を寄せ、洪々首を縦に振っていた。

それでもあいつは笑わなかった。

少なくともこの小さく狭い教室で、おれの見ている前では一度も笑ったりはしなかった。

笑わない。それだけのことに、気を取られている自分がいた。

それが決定的になったのは、あの悪夢の調理実習の前。中学一年の終わり、春休みの直前のことだった。

校内の片隅。校舎と校庭の間にある猫の額くらいの飼育小屋で、つがいのウサギが子を産んだ。

全部で七羽はいただろうか。生まれたばかりの子供はともかわいくて、普段世話などろくにせず、ニワトリの臭いが嫌だと避けて通っていた女子も、頻りに小屋を訪れては、ウサギの子供に触っていた。

だからといって世話をするわけじゃなく、小屋の掃除は相変わらず飼育委員だけがやっていて、そい

つらがしていたことといえば、本当にただ子供を触り、気まぐれに親ウサギに餌や水をやるだけだったけど。

それは一年も例外ではなく、おれと行方のクラスの子も、ちょこちょこ小屋に行っていたけれど、おれは飼育委員じゃなかったし、行方もその中に混じるようなことはしていなかった。

そうして、子供がほんの少しだけ大きくなり、毛も少しずつ生え整ってき始めた頃。

それまで何人もの女子が、かわいいかわいと撫でさすっていた赤ん坊は、ある日全部、喉を食い破られて死んでいた。

簡単なことだった。人間の臭いが付きすぎたまだ幼い自分の子を、ウサギの親が殺したのだ。

動物は子供を育てるとき、人間の臭いが付き過ぎると、危険を感じて世話をしなくなり、殺してしまうことがある。

それはウサギも例外ではなく、少なくとも飼育委員の連中は、それをちゃんと知ってたから、ウサギの赤ん坊は一回り小さなケースに入れられ、むやみに触らないようにと張り紙もしてあったけど、何も知らないやつらはそんな注意に構うことなく、気の向くままに赤ん坊を触っていた。

だからそれはある意味、必然といえれば必然で。当たり前前の結果だったのかもしれない。

けど朝方、それに気づいた生徒達は、その死に様にとよめいて、ひどいと顔をしかめるやつも、かわい

そうだと涙を浮かべる女子もいた。

でもなにより一番騒ぎになったのは、子ウサギが死んだことではなく、食い殺された子ウサギが、七羽全部、小屋の中で並べられていて、みんな目を閉じ、きれいに毛並みを整えられて、花まで供えられていたことだった。

親ウサギではなく、明らかに誰か人間の仕業。

終業式の朝、学校を賑わせていたのは、それを一体誰がやったのか、そして、どうしてそんなことをしたのか、その話題で持ちきりで。

中には、それとも実は親ウサギではなく、そいつがあの子ウサギ達を殺したのだと、訳知り顔でえらそうに語るやつも、それに耳を傾ける連中も、そうした事態を收拾しようと声を上げている教師もいた。

けれど、おれは知っていた。

陽が暮れかけた春の午後。人気の少ない校舎の片隅。ほんの気まぐれに様子を見ようと、飼育小屋の方へ足を運んだら、金網で作られたフェンスの向こう、小屋の中に、しゃがむようにかがんでいる人影がいた。

誰だろう。その小さな後姿に気づかれないように、そっと足音を殺して忍び寄る。特に他意があったわけじゃない。こんな時間にあそこにいるということは、あまり人に見られたくないのかもしれないと、なん

となくそう思っただけだった。

小屋に近づくと、徐々に輪郭がくつきりと形を増していく。肩口までの黒い髪と白いブラウス。小屋の外には靴が一つ転がっていて、それには行方真岐と書かれていた。

ゆきがたまき。

小屋の中にいる、いつか図書室で出会った少女の名前を確認し、何をしているのか覗き見た。

それは、七個の小さな亡骸だった。

開いた口。曲がった首。夕暮れの明かりが徐々に消え、薄暗がりの中に沈んでいこうとする中でも、はつきり分かる、白い毛皮にこびりついた血の固まり。生きていたものの残骸が、小屋の中に置かれたケースから外に出て、無残に散らかっていた。

ケースの金網は、プラスチックの底との接合部が、信じられないほど齧られ破られていて、無理やりひ

っくり返されて、中に敷き詰められていた布切れも餌も水も、全部めちやくちやに散らばっていた。

親が子供を殺した跡。

まだ死んで間もない、その小さな丸い塊の一つを、行方は、そっと手のひらにのせていた。

少しうつつむき加減になった横顔は、その惨状に嫌悪を表しても、手の中で転がる命の終わりをかわいそうだと、哀れみ涙を流すわけでもなく。亡骸を手にはしているとは思えないほど、とても静かで穏や

か。

血が固まり、がちがちに冷えて丸まった、もう生きていない肉塊を。そのひんやりしたまあるい背中を、指の温もりを伝えるように、乱れてしまった毛並みを梳かしてやるように、あいつはそっと、壊れものを触るみたいに、何度も何度も撫で上げた。

おれはあいつのあの手つきを、たぶん一生忘れない。

休みが終わり、新しい教室に入ると、誰もあのウサギの子供を覚えているようなことはなく、同じクラスになった行方もまるで何もなかったように、机に読み終えた本を置いたまま、窓の外を眺めていた。

けどそれ以来、あいつを見るたび、あの日のあいつのあの手つきと、少しうつつむいた横顔が、何度も浮かんで消えていった。

脳裏に焼きついたその仕草は、生まれてくることのなかった妹と、その存在を惜しむように、小さく萎んでしまった腹をゆっくり撫でてた母さんを、ななでか強く思い出させて、気がつく、その後姿を目で追うようになっていた。

それは恋と呼べるほど甘酸っぱいようなものじゃなく、一目ぼれと言ってしまえば、あまりに切なく苦すぎた。

お前、生きてて楽しいと思う？

いつか、そんなことを訊いた。

何か他意があったわけじゃない。強いて言えば、その頃、心なしか、あいつの空気はほんの少しだけ柔らかなで、それまでのどんなときよりずっと、話しやすそうだっただけ。

そのときおれは、淡々と義務のように生き、一度も笑うところを見せたことのないこの少女が、何を思っているのか、初めて本人に訊いてみた。

あいつは、少し考えてこう答えた。

うん。今は、楽しいよ。

嘘ではなく、強がりでもなく。なんの気負いも陰もなく。あいつはただ純粹に、生きてることが楽しいと、おれの目を見てそう言った。

そうか、とおれが応えると、うん、と、まるで幼い子供みたいに、あいつは小さく頷いた。そういうふうに頷けるなら、今は本当に楽しいんだろうなと、なんだか素直にそう思えた。

本当はあいつは普段あまり笑わないけれど、ちゃんと楽しいと思うことを知っていて、それを人に気づかせていないだけなのかなと、あいつの笑う声を聞きながら、そんなことを考えた。

実際あいつは自分の気持ちを隠すのが上手なやつで、それからもやっぱり笑う姿を見せることはなく、一年の頃からずっと変わらない同じ姿で、そこに在り続けていたから、誰もあいつの本心を探ろうとすることはなかったし、あいつが何を思っているか、興味を抱くことはあっても、気にするやつはいなかった。

だからあいつが本当に壊れてしまったとき、それに気がつくことができたのは、あのクラスでは、たぶんおれ一人だけだった。

(つづく)

鳩山 × 一路 サブカル対談

第8回



私たち二人が
映画・小説・漫画等について
好き勝手に語ります。

第8回目のテーマは、映画『共喰い』と『そして父になる』です。

第8回目のテーマは、映画『共喰い』と『そして父になる』です。

鳩山：『共喰い』と『そして父になる』を見ましたが、どうでした？

一路：ちょっと言いたいことあるんだけど、『そして父になる』の映画のチケットを買って、始まるまでに時間があるから、外に出たのね。そして、主役四人が舞台挨拶終わりだったらしく、通用口から外に出てきたところに遭遇したの！

鳩山：ええ！ すごい！

一路：昔、福山雅治のライブに行った時に、豆粒を双眼鏡で覗いている状態だったのにさあ。まさか一メートルぐらいのところを本人が歩いているなんて、感動でした。尾野真千子と真木よう子もきれいだったよ。リリーフランキーはおっさんだった（笑）是枝裕和監督もいたと思うのだけど……気付かなくて。残念！

鳩山：福山は海外の映画祭でもかっこいいと話題になっているらしいね。

一路：背が高くてスタイルがいいしね。『そして父になる』の映画の中で、銃のかわりにギター持ってたところがよかったな。

鳩山：同感!! でもそこしか良いところなかったけど！

一路：あはは（笑）子どもにきつい父親役

だもんね。

鳩山…著の持ち方教えるところとかね。

一路…そう、少しづらかったな。

鳩山…とりあえずそんな非現実的ハンサムの福山が、普通の父親役をするっていうのがこの映画のポイントだったんだと思うけど、その辺どうでした？

一路…是枝監督好きとしては、あまり今までの作品みたいな自然さが出てなかったと思っ

鳩山…うんうん。

一路…是枝監督の良さがなくなっていて、父親役をしていた福山の「演技」を見たという感じだったよ。

鳩山…なんかあくまで「福山」って感じだったね。しかも今回の話って、血の繋がりがテーマだから、やっぱり顔が似てるとかどうしても血の繋がりの要素を出さないといけないけど、それがフィクションだと難しいよね。

一路…そうだね。

鳩山…福山のDNAが、兄や父親とか子どもから感じられない。

一路…誰も似てなかったね。

鳩山…似てないね！

一路…真木よう子が、「上の子だけ似てないのよね」という台詞があるけど、感じられないもんね。

鳩山…そうそう。

一路…あと、尾野真千子と真木よう子が逆じゃないかと。

鳩山…そうそう！ その方が自然だよ。

一路…昔やんちゃしてたヤンキーがリリーフランキーという地元で昔悪かったおっさんと結婚したっていうふうにしては、真木よう子がきれいすぎて何か合わないんだよね。

鳩山…尾野真千子と福山がどうやって社内恋愛したのかも想像できない。

一路…そうだよ。福山の家ももっとお金持ちだったら分かるけど、意外に庶民的な感じで。

鳩山…前は金持ちで、転落して貧乏になっただって設定なのかって。でも、そんな設定も複雑すぎるかな。

一路…だってさ、取り違えをやった女の犯行の動機が、「うらやましかったから」って言うってたでしょ。だからこそ、もっとお金持ちと庶民の結婚っていう感じを出していればよく分かるけど、福山の家の設定が少

し複雑だったね。

鳩山…うんうん。わかりにくいよね。父親は金持ちで厳格なままで良いのかなって。

あと、取り違えと再婚と継子ってことを同列に扱っている感じがあったけど、それは全然違うかなって。

一路…確かに。

鳩山…人為的に取り替え事件が起こったってことにすると、話が複雑すぎて、結局子どもをどうしたって、見ている人もすっきりしないというか。交換するのかしいのかってという結論だけを見ちゃう。

一路…取り違え事件で、血なのか時間なのかということを話題にしつつ、再婚して血のつながらない母子が出てきて、母親を守ろうとしているのを見て、結局自分の父親性の問題だと分かっていうストーリーなんだろうけど。何かすっきりしないよね。

鳩山…しない！ もっと普通の設定でいいから、家族の地味な話を描いた方がよいのでは？

一路…確かにね。是枝監督は、ドラマの「ゴイングマイホーム」みたいな話を映画で丁寧に描くタイプの監督だわ。

鳩山…「ゴイングマイホーム」は良かった

ね!

一路…よかったよね。ただ、視聴率もあんまり良くなくて、テレビ向きじゃないのが難点。

鳩山…でも、あれだけ時間が取れるからこそ、あの話を作れるわけで、ゴイングマイホームは良かったと主張したいです。

一路…各回で地道に人物像を描いた結果だよ。最終回がやっぱりよかったもん。

鳩山…そうそう。男の人の結婚とか子どもができるってことに対するとまどいとか気持ちを書けば良い映画になると思うし、それを福山にやらせたら福山も活きると思う。遊び人なイメージがあるだけに。

一路…そうだねえ。

鳩山…とはいえ、いちおう映画を観たので、定番の質問ですが、子どもが取り違えられたら、一路さんならどう思うと思う?

一路…難しいなあ。映画を観ていて、「三つ子の魂百まで」っていうのをすごく考えたんだよね。大事な時に自分の育てたいように育てられなかったら、その後も愛していくことができるのかなあと。これは母親の感覚なのかもしれないけど。

鳩山…例えば反抗期に万引きしたりして、

それは誰でもあり得ることなんだけど、そういう背景があったらそれを血のせいにしてしまったら。

一路…絶対に、何か問題が起こった時に、小さい頃に育てた人のせいとか、血のせいにしてしまう。ただ、福山も映画の中で、血のことを気にしていたけど、血ってそんなに重要なことなのかなあ。

鳩山…実際にこの世のどこかに自分と血が繋がった子どもがいるって分かったら、その子のことは気になるよね。目の前の子どもが可愛くても。

一路…気になるね。どんな人生を歩んでいるのか。

鳩山…映画の中で病院側が「取り違えが起きた家族は、100%交換を選択する」って言うってけど、気になる割合が血が繋がっている方が大きいからなのかな?

一路…いつ交換するかもよと思うんだけどね。映画でも、小学校に入学する前に、早い方がいいって言うって。だから、その割合はいつ交換したかというのも明示してほしいと思ったけど。

鳩山…そうね。

一路…まあ、大きくなればなるほど、辛い

よね。どうするか決めるのが。鳩山さんは、自分の身に起きたらどうする?

鳩山…交換するね。そして相手の子のこと忘れろ。

一路…お、あっさり。意外にドライだね。

鳩山…なんか私はそもそも夫婦は他人だし、家族って強固なものじゃなくて、ゆるやかに家族になることができるって感覚的に思っている。だからこそ、そこはあっさり交換すると思うな。

一路…私は逆のこと思ってたんだよね。つまり、夫婦は最初から他人だから、子どもだって血が繋がってるとかどうかって関係あるのかなって。

鳩山…それが難しいのが、本当に血が繋がった子どもが存在するってとこなんだよね。ただ子どもができない夫婦が養子をもらうとかなら良いと思うけど、そっちの子どもがどうしたって気になるもんね。

一路…血が繋がっている子どもが実際に存在しているんだもんねえ。

鳩山…その子を知らないふりするのは不自然かなと。だからこそ映画の中でも、二人引き取るって言い出すんだと思うけど。

一路…うん、そうだね。

鳩山…でもやっぱりこの二者択一は難しいっていうかあんまり意味がないかもね。もっと普通に家族の話をした方が良いのかな？

一路…私としては、『共喰い』と比較したいところですが。

鳩山…そうね。『共喰い』は逆に血の呪いというか、血の繋がりにから逃れたい話ですね。

一路…『そして父になる』で、血が繋がっている子どもがいることがやっぱり気になって、結局は交換という選択をとるのだとしたら、私としては、『共喰い』は、血を強制されたような気がするんだよね。

鳩山…うん。

一路…主人公のお母さんが、「あんたはあの男の子どもだから」って何回も言うんだけど、結局暴力的な行動をとってしまうのが全部血に集約されていくんだよね。予言的というか。刷り込みみたいな感じで、その行動に向かっていく気もした。

鳩山…ヒミズの「最初から決まってる」って台詞を思い出しました。とにかく、主人公が弱すぎる！

一路…そういう考え方っておかしいんじゃないかと思うんだけどね。自分で変えられ

ないことが世の中に存在しているのか、と。

鳩山…結局父親は主人公のことは殴らない設定だし、いつも女の人に守ってもらってる。最後父親を殺すのも母親だし、彼女に縛ってもらってセックスするというオチも父親殺しの話ってよくあると思うけど（それこそヒミズも）すごい受身っていうのが『共喰い』の特徴かもね。

一路…そうだね。男が女を暴力的に扱っている話のように見せかけて、「やっぱり、女って強い」っていうのを何度も繰り返し返している。近年、男が受け身っていう物語って多いね。これは、昔の家父長制の形の物語の反動なのかしら。

鳩山…「上から受身」だね。

一路…あ、そうね（笑）現代的なのかなー。

鳩山…そうなのかな？ そうかもね。

一路…ただ私は、「やっぱり女って強い」っていう物語はもういいかなと思うんだけど、もっと何か越えた作品がほしいなあ。

鳩山…ワンピースとか進撃の巨人みたいな、「俺たちががんばらなきゃ！」っていうか世界に立ち向かう系の漫画が流行っていて。

一路…一方でそういう話も皆好きでしょ。半沢直樹とかも立ち向かう系。それがテレビ的で、

『共喰い』は映画的なのかな？

一路…確かに、男が敵に立ち向かう系ってみんな好きだよな。ちょっと癖のある男は、『共喰い』みたいな作品にいつちゃうんじゃないかな。

鳩山…そうなのかなあ。でもさ、『共喰い』のお母さんの、お父さんだけは腕がないこと笑わなかったっていうのは好きだったよ。汚いなぎのエピソードとか。

一路…あつたね。

鳩山…うんうん、そういう恋愛ものとして見れば、私としては良かったかもな。最後に母親が父親を殺すのも、恋愛ものと思えば自然な流れかも。

一路…そうだね。暴力をふるわれても、どこかで軽蔑しながらつながっているような感覚。

鳩山…うん。

一路…主人公の恋愛も、何となく古谷実系だよな。自分のことを好きな人がふっと湧いて出てくる。

鳩山…全肯定だよな。

一路…もう少し、相手の女の子のことも知りたかったな。結局、お母さんの働いてたお店で働くことになってさ、主人公にお母

さんと同じご飯とか出して。でも主人公は、父親の元恋人のところに行ったりして。あの女の子はどんな気持ちで、あの田舎から出ずに暮らすんだらうと思った。

鳩山…そうだね。女の子の背景はあった方がよいね。

一路…お母さんも、最後に突然昭和天皇崩御のこととか言い始めて、昭和の終わりっていう感じだけど、いまいちピンとこなかったんだけどね。父親が死んで、新たな時代の始まりっていうことを暗示していたのかもしれないけど。

鳩山…時代設定は中途半端な感じだよな。一路…うん、もっと古くてもいいような感じだよな。

鳩山…そうそう。戦後臭って感じにしては最近すぎるし。

一路…そうだよな。田舎って言っても、山口でしょ。普通に現代っぽいよね。結局、人間は血なのかな。どうして皆そこにこだわってしまうんだらう。

鳩山…なんか家族って顔とかもろに似ていて、血が繋がっているって完全に分かるよね。親子とかそっくりだもんね。それに時間も加わって何とも言えない濃いものだよ

ね。この年になると家族の歴史とか、普段が会社とかだと距離を取った関係が多いからかもしれないけど、家族の方が非日常に感じるんだよね。それぐらい特殊というか。

一路…そうか。家族の方が非日常なのか。鳩山…うん、家族は非日常だね。今実家に帰って何か家族で話していたりすると、そういう芝居をしているような気がしたりするもんね。でもそれは、もう記憶にも残ってないぐらい、ものすごい時間を濃密に過ごしていて、意識化されていないんだけど、そこにはそれだけ揺るぎない関係性があるんだよね。心底安心してるからこそ、軽んじることができるといふか。

一路…最初から一緒にいなければならぬってというのが、不思議なことだもんね。

鳩山…子どもにとってははいるのが当たり前だもんね。でも大人になったら、他人に近い感覚になるのも当たり前なのかも。仲悪くなる兄弟とかいるし。

一路…社会的な関係が、家族の中にも発生してくるからだらうね。契約ごととか。親戚が増えたり、夫婦になったり。

鳩山…でもふとしたときに、子どもに戻るっていうか、私のルーツってこれか！って

思うこととか、それこそ血の繋がりを感じてしまうエピソードとかあるよね。

一路…そうだね。結局小さい時に兄弟と離れて暮らさないから、それが血なのか、同じ親から育てられたからなのか分からないのだけど、家族以外の人から指摘を受けたりするね。

鳩山…うんうん。でもさ、職場とかでもあまりに一緒にいすぎて、しゃべり方一緒になったりするよね。そう思うと時間ってことなのか？大学の先生が、「ものまねは愛だ」って言っていたけど。

一路…ものまね？

鳩山…好きな人としゃべり方が似てくる話。一路…あーなるほど。嫌いな人の話し方はまねしないもんね。

鳩山…そうそう。そうやって人は次の家族を作るんだな。

一路…一緒にいる時間が長い人とね。学校だったり、職場だったり。

鳩山…うん。

一路…なんか恋愛の謎がとけたね(笑)

鳩山…生涯独身の人もかも多い現代では、同性同士とか、結婚という形じゃなくてもそういう関係に近いものがそれぞれで築か

れているのかな？心の支え的な。

一路…それあるかも。ドラマ「抱きしめた
い」でも、結局W浅野は54歳になっても一
緒にいたもんな。

鳩山…あれは良かったね。元氣もらったよ。

一路…おもしろかった。あくの強い女優た
ちだわ（笑）

鳩山…そうね。

一路…『そして父になる』はずしく話題で、
ハリウッドでリメイクらしいよ。

鳩山…ええ！

一路…しかも、スピルバーグ監督。

鳩山…えええ！

一路…でも、是枝監督は、伊丹十三とかみ
たいに、邦画だから活きるタイプだと思う
んだな。

鳩山…そうね。

一路…子ども取り違えていうネタだけを
とってハリウッドで映画をつくれればいいけ
ど、それを『そして父になる』のリメイク
として製作するのは違うと思う。

鳩山…やっぱり取り違えとかのネタがない
と、映画として話題にならないんだね。「ゴ
ーイングマイホーム」だと、そういう事情
があるのかな。

一路…邦画も、メジャーと単館系とあるけ
ど、「ゴーイングマイホーム」だとお金がと
れないんだろうね。ハリウッドもやっぱり
興行成績の問題だよ。エピソード重視と
いうか。

鳩山…そうね。関係ないけど、結局福山も
ピアノ途中で止めたってエピソード、かな
り中途半端な感じがしたっていうか、統一
感がなかったような。

一路…あのエピソードは、血なのか時間な
のか曖昧にしたかった結果、差し込まれた
感じもする。福山は完ぺきにこなす人であ
り続ければ一貫性があるのにな。

鳩山…あと、ギターのシーンだけが良いつ
て言ったけど、真木よう子のウイנקも良
かったよ。

一路…あーたしかに！

鳩山…写真としてみたら良いよねってシー
ンはたくさんあった。そこはさすがだね。

一路…細かい技は是枝監督らしいね。

鳩山…うんうん。是枝監督には、「ゴーイン
グマイホーム」のような話を恐れずに作り
続けてほしい。ということでおわり。

一路…そうだね！

（終）

XYとXX

馬場貴生

「結局、あなたはそう言って、奥さんと別れられないのよね」

有紀子がそう言って私の方を見る。

口元は笑っているが、目が刺さりそうに鋭い。

有紀子と私は温泉旅館へ来ていた。

山奥にある、あまり知られない温泉である。

私たちは人に見られてはいけなかった。いや、誰も気が付かないだろうが、私たちが見られたくないのだ。私たちの愛のようなものを、燃え上がらせたのがそう言う背徳感も相まつての事であったからだ。

「色々と段取りが必要なんだ。そのうち、しっかりと別れるから」

私は有紀子にそう言った。夕食を終え、一服しているときであった。口の中で煙草の煙が、夕食の山の幸の残り香を侵食していく。

「男の人って、感情と理屈を別にかできないのよね。感情で動く時は理屈を無視して、理屈で動く時は感情を無視するのよ。だから女が傷ついていることも気が付かない」

有紀子の喋り方は、全てを知ったる仏か何かのようだ。

女は男よりも頭がいい。それは古来よりDN

Aに刻まれし本能だ。男が外で狩りをしている間、女は家を守らねばならない。その為に女は、洞察力や感覚に長けるのだ。

私はそのあたりの事を心得ている。

男は馬鹿な事も知っている。有紀子の仰る通りで、私は理屈と感情を同時に実行することができない。そうして説明を求める女を抱きしめようとし、抱きしめてほしい女に対して講義を行ってきた。

果たして、ここに有紀子と来たのは理屈だろうか。感情だろうか。

有紀子は長らく私を恨んできた。恨みながらも愛してきたらしい。

私は妻帯者で、しかし、女を頼った。私は本質的に淋しい人間で、いつもそばに女がいなければ耐えられないのだ。

昔、私が死を考えた時、側にいたのが有紀子であった。

死を考えるのは、正しい事だと知った上で、死を考える自分に私はうんざりしていた。有紀子はそのような私を抱きしめ、私の顔が、その乳房に委ねられることを許してくれた。

有紀子は水商売の女であったが、私は有紀子に甘えられることがこの上なく幸せに感じたのだ。

ああ、またしばらく生きていける。その時、そうはつきり考えたのを憶えている。

「ねえ。ここで死にましようよ」

不意に有紀子が言った。

「あなたに奥さんがいるのは、仕方がないと思っただけの人生につかれたの。あなたも奥さんと別れられないんでしょう？ だったら、死んでよ。死んだら、何もかも関係ないでしょ？ ねえ、死んでよ」

「死ぬとか、そう簡単に言うもんじゃない」

「私が簡単だった事なんて、一度もないのよ。ねえ、愛しているのよ」

有紀子に対して愛はあったのかと問われれば、この瞬間まではあったかと思う。しかし、この瞬間、私は有紀子を面倒くさい女だと思ったのだ。

有紀子はそれを察したのか、私の口を自分の口で封じ、私を押し倒し、浴衣の帯で私の首を絞めた。

「死んでよ。私もすぐに行くから」

私は、遠くなる意識の中で、有紀子の顔を見ていた。

しかし、有紀子は、私の魂が抜けた身体を前にして、どこかに逃げていった。

私は自分の体に、有紀子に対するあらゆる感情を残さなかった。私の魂が抜けたと同時に、その身体はただの物質に成り下がった。

有紀子はそれを察したのだ。

完



第6回「恐怖のブルックナー」

NHK 交響楽団*1 は怒っていた。怒りはしかし、これ見よがしな怒りではない。それは、火口奥に真っ赤な溶岩が覗くように、得体のしれない、暗く、重い恐怖だった。

日時:2006年5月13日(土)

曲目:アントン・ブルックナー*3 作曲「交響曲第8番ハ短調」*4

指揮:スタニスワフ・スクロヴァチェフスキ*5

演奏:NHK 交響楽団

会場:NHK ホール

アントン・ブルックナーの交響曲は、神への感謝の気持ち*6にあふれている。だから、日本では亡くなった朝比奈隆*7の「暖かみ」にあふれた演奏が大人気だった。朝比奈隆のブルックナー演奏は、日本中の図書館に置いてある。

私は、しかし、もっと変わった演奏を聴きたい。巷にあふれる「ちょっといい話」より、ズシンと響き、心をかき乱されるようなものを聴きたい。

そう思ってあちこちの演奏会に出かけていたところ、このブルックナーの演奏会に出くわした。ここまで強烈な演奏に出会えるとは思わなかったので、威力は激烈だった。

1楽章冒頭は、あのベートーヴェンの第9交響曲*8と似た始まり方をする*9。混沌とした音の霧の中から、最初のメロディーが出てくるのだ。ベートーヴェンでもブルックナーでも、出てくるのは衝撃。日常生活を超越したそれこそ「神の鉄槌」が人々を直撃する。この日のブルックナーはまさにその鉄槌だった。そこには優しさなどない。ただただ理不尽な怒りである。怒りは怒りのまま、ふくれあがり、頂点に達したところで(気配を残したまま)すうっと消え去る。私はその演奏に震え、しかし魅了されてしまった。

2楽章は、これまたベートーヴェンの第9と同じく、A(ドイツの野人)→B(野人の祈り)→A'(複合)3部形式でスケルツォ*10。そこでも、Aパートに、普通の演奏で聴かれるような愉しさは感じられない。テンポが速いせいも、切れ味も抜群である。

また、普通心安らぐBパートがまた独特。多くの演奏なら、嵐の中で一息つくところ。しかし、もっと切実で、生命の危機を僅かな間だけ回避できた感じで安堵とは程遠い。その短い魂の休息も、すぐにAパートとなってバラバラに切り裂かれてしまう。

3楽章は、この交響曲の山場である。「綺麗で優しく甘い」いわゆる緩徐楽章。作曲家は腕によりをかけて美しい曲を作る。ブルックナーの作品の中でも、この楽章が好きな人間は多いそうだ。楽章の最後になって、余韻を残しながら幻となって消えていく。その名残惜しく消えゆく様が、強い憧れへと転化する。

ところが、今回の演奏は美しくない。油断すると今にも襲いかかって来そうな、恐怖と背中合わせ

のぎりぎりの天国なのだ。そう、悪夢である。聴いている人間を安心させてくれない。恋愛映画のつもりでいたら、実は心理スリラーだった。そんな感じである。

たいていの演奏家なら、夢から覚めるようにこの楽章を終える。なので、例えば、デザートを食べ終わった時みたいに、(食べ)終わってああ残念と思うところ。けれど今回はもちろんそうではない。次にやって来るのはおそらく地獄絵図としか思えない。例え悪夢であっても、この夢は覚めて欲しくない。叶わぬ希望を抱きながら、とうとう3楽章の終わりを迎えてしまった。一体、最終楽章はどうなるのだろう？

ちょっと横道に逸れる。かのベートーヴェンは、あの有名な第9交響曲の最終楽章に人の声を用いた。それまでの1~3楽章はどれも、「いや、そうではない」と言わんばかりに、それぞれの楽章を否定して終わる。3度も自己否定をした上で、「とてつもない曲」を作ろうとした結果である。それが成功したか失敗したか、今でも意見が割れている。

ベートーヴェン以降の作曲家たちも、ベートーヴェンに憧れて同じようなドラマ作りに取り憑かれた。幾多の困難が襲いかかり、最後の最後になって救われるというドラマである。例えばブラームス*11の交響曲第1番。終楽章の高揚感はとてつもない。それを聴いた指揮者のハンス・フォン・ビューロー*12は、「これぞベートーヴェンの交響曲”第10番”だ」と絶賛した。確かに立派な曲だけど、水戸黄門的な王道パターンが決まりすぎていて聞き飽きてくる。例えばチャイコフスキー*13の交響曲第5番。メロディーメーカーだけあって聞き飽きることのない名曲だけど、「最後がわざとらしい」と(作曲家本人が)言って、同じような曲は作っていない。

話戻って、ブルックナーの最終楽章である。たっぷり震え上がった上で、(小休止を取ることなく)3楽章から終楽章に突入となった。どう落とし前をつけるのだろうか？

圧倒された。

「軍隊の行進」とも言われる冒頭のメロディーが、凶暴性はそのまま、しかし、燦然と輝きながら舞い降りたのだ。凶暴な、それこそ黒光りする巨大な塊が乱舞する。最初の楽章に出てきた「神の鉄槌」が、とうとう真の姿を現した。恐怖ではあるが、しかし、不快ではない。いや、あまりにも突出して巨大なので、却って打ちのめされることが心地よい。よく聞く「ブルックナー=神への憧れ」の話が嘘みたいだ。神は人間の描けるものではない。認識できないくらい巨大になって初めて神と思いきめるのだ。

残念だったのが*15、終楽章後半。冒頭の「軍隊の行進」が繰り返されるところで、オーケストラの音が乱れた。それ以降、演奏がおかしくなり、それまでの恐怖感が後退してしまった。

小さな傷はともかく、素晴らしい演奏だった。何が素晴らしかったのか？一つは、全体を通して、恐怖感が一貫*16していたこと。そして、教科書的*17な「ブルックナー=神への憧れ」を吹き飛ばす演奏だったことだ。ブルックナーが創造した音楽は、本当はこんな音楽なのではないか？いや、この演奏を聴いた限り、そうとしか思えない。

指揮者のスクロヴァチェフスキは素晴らしかった。「職人*18」というキャッチフレーズで売り出した指揮者だったけど、こんな神懸かりの演奏ができるのだ。演奏会は行ってみないと分からない。



- *1 NHK 交響楽団:日本最初のプロオーケストラ。渋谷にあるNHK ホール*2を拠点に活動している。東京以外に日本の各都市で演奏活動を行う。
- *2 NHK ホール:渋谷NHK スタジオにある。何度か行ったけど、シミだらけでくすんだカーペット、駅弁みたいな安っぽいサンドウィッチ、紙コップで渡されるコーヒーなど、かなり残念。
- *3 アントン・ブルックナー:オーストリア出身の作曲家(1824-1896)。教会のオルガン奏者として活躍しつつ、生涯に9つの交響曲と、2つの交響曲の習作、合唱曲、宗教曲などを作曲した。偉くなった晩年、少女に求婚して回った話は有名。もちろん、凄い作曲家である。
- *4 参考録音:1949年、フルトヴェングラー指揮、ベルリン・フィルによる演奏。<http://p.tl/TQRV>あるいは<http://p.tl/9RDs>
- *5 スタニスワフ・スクロヴァチェフスキ:ポーランド出身の作曲家(1923-)。非常に引き締まった演奏をする。いわゆる巨匠指揮者が次々と亡くなった結果、新たな巨匠として90年代に急に持ち上げられた。とはいえ、90年代から現在まで第一線で活躍しているということは一流の証明。指揮者は長生きしたものの勝ち?
- *6 神への感謝:実際ブルックナーは敬虔なカトリック教徒だった。
- *7 朝比奈隆:長年大阪フィルの音楽監督を務めた(1908-2001)。朝比奈といえばブルックナー、ブルックナーといえば朝比奈とまで言われている。ヨーロッパで特別人気があるわけではないブルックナーを、日本のクラシックファンの多くが聴けるのは氏のおそらく最大の功績。
- *8 ベートーヴェンの第9交響曲:年末になると必ず流れるあの「第9」。本文でけなしてしまったけど、私が最初に買ったCDはこの第9(カラヤン指揮)。演奏会に行くと、迫力ある合唱に圧倒されること請け合い。
- *9 似てるも何も、実は引用である。曲の構成自体もよく似ており、ベートーヴェンの第9を意識して作曲されていることがよく分かる。ちなみにブルックナーはもう一曲交響曲第9番を作曲しているが、完成できずに亡くなっている。これまたスケールの大きな大曲である。
- *10 スケルツォ10:イタリア語で冗談を意味する。日本では「諧謔曲」と訳される。軽快でちよつとふざけたAパートに、緩やかなBパートが挿入されるABA'の3部形式が普通。
- *11 ヨハネス・ブラームス:ドイツの作曲家(1833-1897)。ドイツ人が暗くて頭でっかちというのは、この人が作った印象ではなかろうか?ブルックナーを馬鹿にしていたとかそうでないとか。晩年の交響曲第4番は、行き詰まり感の強いなんとも悲惨な曲。村上春樹「ノルウェイの森」に出てくる突撃隊(あだ名)が姿を消す際、この4番が出てくる。
- *12 ハンス・フォン・ビューロー:ギネスブックにも載る世界最初の指揮者(1830-1894)。ブラームスのことを、ドイツの誇る3人の名作曲家と持ち上げた。それが「ドイツ3B」(バッハ、ベートーヴェン、ブラームス)。あのリヒャルト・ワーグナーに妻*14を奪われ、ワーグナーを追い落とすためにまだ無名だったブラームスを持ち上げるためもあったらしい。
- *13 ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー:ロシアの作曲家(1840-1893)。交響曲第6番、ピアノ協奏曲第1番が有名。その突然の死があれこれ取りざたされる。
- *14 妻:コジマ・リストのこと。ピアノの魔術師フランツ・リストの娘である。
- *15 残念だった:余計なことを書いてしまった。まったく残念だ。
- *16 一貫:絵画でも、小説でも、演劇でも、作品を貫く思考がはっきりしているといいらしい。私はいい加減なことで一貫しているが、誰も褒めてくれない。
- *17 教科書的:舞台や工芸の世界では(それ以外でも)、若い頃にかっちり型を作り、後年になるとその方から飛び出すのがいいらしい。マニュアル全盛の現代とは全く別の世界だ。
- *18 職人:クラシック音楽の場合、どちらかというと、あまり特徴のない指揮者や、オーラの無い演奏家を持ち上げるときに使う言葉。スクロヴァチェフスキ氏は、「職人」と呼ばれることをどう思っているのだろう?



THE FOOL

よみびとしらず 詠人不知

目の前は崖っぶち。両足の膝が面白い程に笑ってる。いや、踊ってる？今この瞬間、小生に求められたアンサー……。

あ、…朝？。

カット割りも甚だしく、ぶらりと天井から垂れ下がった豆電球。いつもの光景だ。あれはいつぞや、うくん、十五夜？、床から見れば、ほら、シャレてるね、お月様に見える…なんぞとロマンティックに耳元でそっと息を吹きかけ囁いていた何処かのストレイキャット。貧乏です、貧乏です、全てこのピンピン棒が悪いのです！！などと抜かし、そんなロマンティックを尻目に俺のデイックは今まさに殺しのスタンバイOKなんだよ、迷子の迷子の子猫ちゃん、うひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃあゝ！！

デーデン、デーデン、デデデデデデデデデデデデデデデデデテテテテテテテテテテテテ…。

…イテテ。あ、頭が、あ、頭が痛いのです。き、今日が昨日で、き、昨日が明日で、あ、明日の今日なら、き、記憶が曖昧ミーメインなのです。

「ふざけるな!!」

監視官の怒声が飛ぶ。そ、そんな怒鳴ると小生ドナルドになっちゃうよ、グウアグウア…、あ、あく不落。

監視官が小生のアヒルネタを完全に無視した為、これから長い長い沈黙が続く。

…、…、…、てんてんてん、テンテンテン、…テケテッ、テケテッ、テッレッ。ペッ。

この長い沈黙に堪えきれず、サスペンシ的なBGMを用意してみたというのに、向かいのパイプ椅子に腰かけている監視官

は顔をビクリとも動かさず、腕組をしたまま両目を閉じている。

お、おまえさん？、お、おまえさん？、前にいるからおまえさん。そうしてお呼びしてもいいでひよか？ひよんな事からおまえさん、おまつ、ま、まさか死んでいるのか…！？

「黙れ…！！」

急に目を見開き鬼瓦のような形相で怒鳴る監視官。

かかつ…！！…き、きたね…よ、急にでかい声出しやがってよ、よう、いきなり脅かすパターンはないやろ…、なあ…、なあ…、てえ…。

…む…むむむ、無視ってか…、完全無視ってか…、こっちの語りかけには一切応じませんってか…、黙秘権バンバン行使ってか…、なあ…、なあ…、てえ…。

なあ…、なあ…てえ…、なあ…てえ…言ってもシヤイで…シヤイで…黙ってらっしやいってか…？は、ははあ…ん、う、うん、え…本日は晴天なり、寄ってらっしやい親でらっしやい、これから皆様にご覧いただくのが…、黙ってらっしやいで…あります…。

「黙れ…！！」

すうすう…！！だ、だから、す、すごい声をいきなり出すなよ…、なあ…なあ…てえ…。

「つまりだ」

…つ、詰まり？と、トイレ詰まってんの？

「…つまりだ」

つわり？はは、おまつ、おまえさん、男でひよ？

「……つまり、あんたは今、ここが何処かわかってないだろう？」

ポ…ン。

ん…、ん…。

ピンポ…ン。

ん？ん…？おまえさん？あ、あれ？おまえさん？

ピンポ…ン。

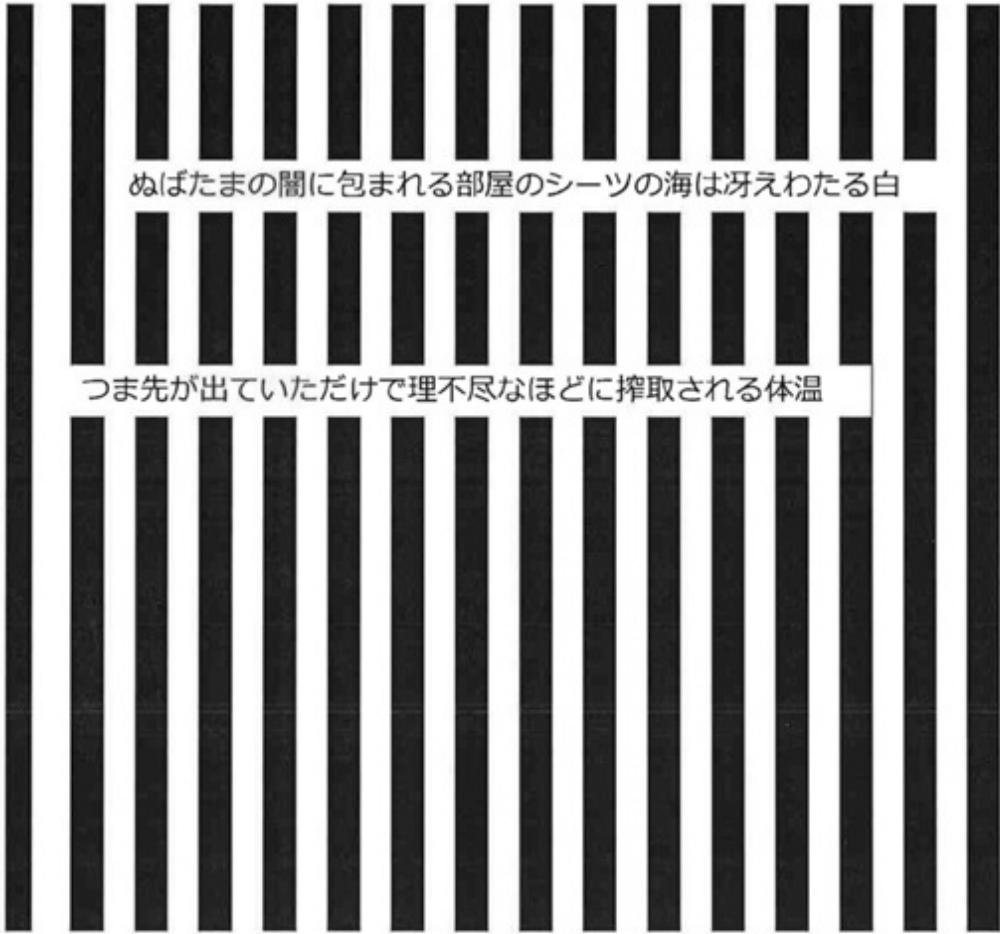
またしてもこのカット割り。ぶらりと垂れ下がった豆電球。いつもの光景だ。あれはいつぞや、う…ん、お通夜？

(終)



Bed time story

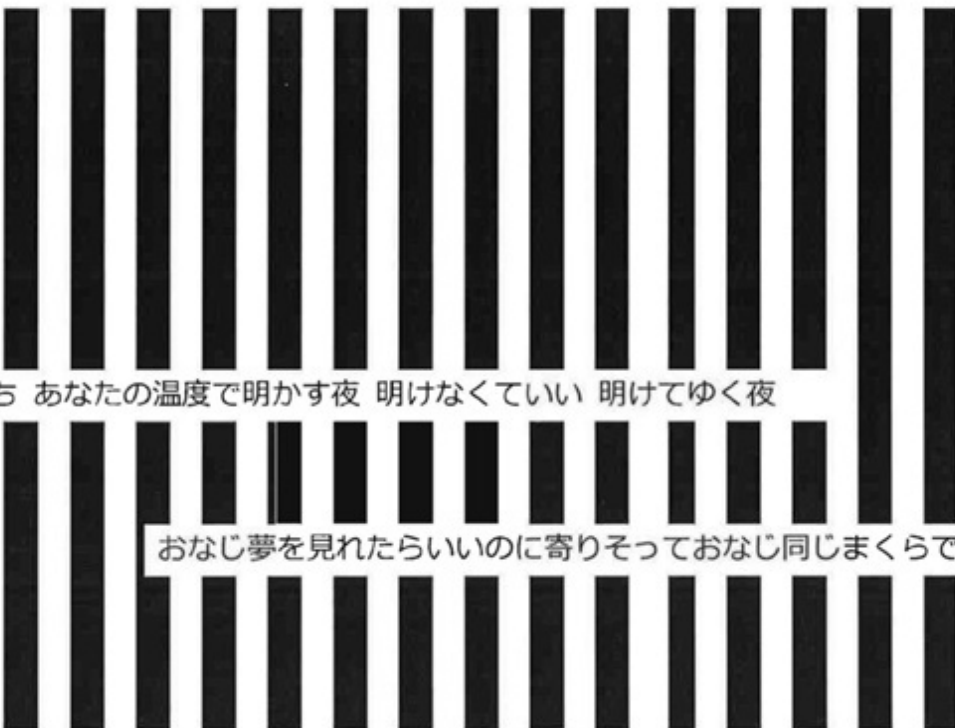
mai



ぬばたまの闇に包まれる部屋のシーツの海は冴えわたる白

つま先が出ていただけで理不尽なほどに搾取される体温

一ヶ月ぶりにあなたに逢える朝は早起きさえも特技にかわる



夢ごち あなたの温度で明かす夜 明けなくていい 明けてゆく夜

おなじ夢を見れたらいいのに寄りそっておなじ同じまくらで眠った夜は

きらきらかがやく朝陽に幕降ろすあたしのシンデレラストーリー

朝なんてこなくてもいいひとりきり淋しさごまかす為の睡眠



忘れようと記憶を埋めるほどに美化されてあなたにまた堕ちてゆく

何度でも逢うことができる二度と逢えないと思ったあなたと夢では

抱き枕に騙されてあげる大好きな腕や肩とは違うと知るも

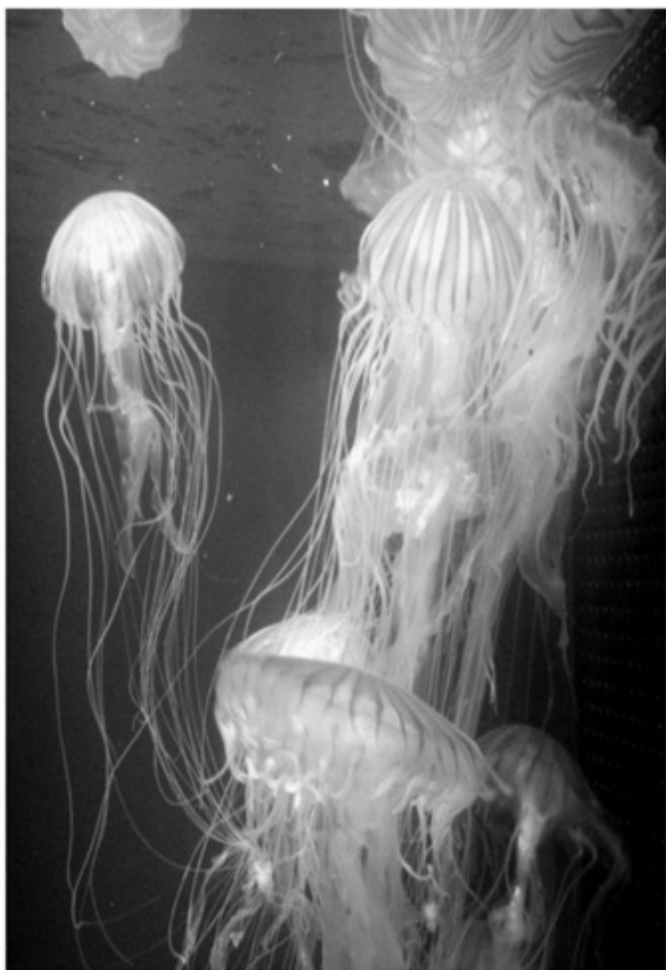
お好みで繰り広げましょう朝焼けにつつまれるまではおとぎ話を



ぶ ん だ ん リ ケ シ ョ

文系男子×理系女子

一 路 真 実



白黒はつきりさせられるものなんて、この世に存在するのだろうか？ 全ては曖昧で、どちらかを選ぶなんてできない。ホワイトとブラックだって、それが反対の色だって誰が決めたんだ？ 絵の具をすべて混ぜたって黒にはならないし、色の三原則は混ぜても白にはならなかった。だったら、物事に区切りをつけようとしたのは一体誰なんだろう？

「ミツル、また何か考えてるでしょ」

傘のグリップについたパンダを見て、ミツルの思考は発展していた。

「あ、ごめん」

はっとしたミツルに向かってカヨコは少し笑うと、手から傘を抜き取って、元の傘立てへと戻した。パンダだけでなく、カエルやウサギ、イヌやネコとそれぞれ違う動物が並んでいる。

「買わなくていいの？」

「ちよっと子どもっぽいかな。次の店に行こう」

カヨコの歩きだした方向にあわせて、足を踏み出した。少し前を歩くカヨコの

背中を追う。揺れるブリーツスカートに描かれた、小さな水玉模様は、まるで水しぶきのようだ。そうだ、太宰治はどうして入水自殺なんてしてしまったんだろう。そもそも、自殺未遂を何度も繰り返したのはなぜだ。一人で死ぬのではなく、心中という形態を取りたがるのは？ 僕だったら、どうだろう。カヨコと一緒に死にたいと思うだろうか。いや、カヨコが僕と一緒に死にたいなんて思わないだろう。絶対に。

カヨコが足を止め、棚のものを眺める。ミツルも、棚に置いてあったアロマの瓶を手を取った。テストのテープが貼られた蓋を取り、鼻を近付ける。森林浴をしているような、木の匂いが鼻腔を抜けて脳に直接効く。ミツルの頭に広がるもやもやとした思考が、一気に取れて行くようだ。値札近くのポップに「ストレス解消」と書かれていた。

「カヨコ、この匂いちょっと嗅いでみて。すうっとして気持ちいいよ」

瓶を手渡すと、カヨコは右手を仰ぐよ

うにして鼻に向けて風を送る。ぎよっとしたミツルの顔に気付いて言った。「あ、しまった。薬品を嗅ぐ時の癖が出た」

「小学校の時に理科で習ったな、その動き。さすが理系女子」
言いながら、思わず吹き出した。

右脳と左脳は得意とする分野が違う。直感的で感性の強い右脳と論理的な左脳。両方あって脳が働き、人間はいくつもの行動を同時に行っている。ただ、どうしてだろう。不思議とどちらかの動きが強いような気がする。

ミツルは、小さい時から理数系が苦手だった。自然と文系の学部を選んで、大学に入学。同じサークルにいた、小柄で華奢なカヨコに一目惚れをした。ゆるく巻かれた焦げ茶色の髪が肩へ軽やかに落ちる。色の白い丸顔が、こちらを向くと、大きな黒眼に吸い込まれてしまいそうになる。こういうタイプはいかにも文系女子だ、同じ学部にはいない、と思ったの

だが、予想に反してカヨコは理系だった。カヨコは、ある時、ミツルを呼び出した。

「あなたが書いた文章って、意味不明なのよ」

そう言うと、持っていた手紙を機械的に読み上げた。

「あなたは、まるで深海から見上げた時に見える一筋の光のようで、動く水面に乱反射するけれど、僕には届かない。それでも、光と影はいつも隣り合わせになると、地球は回転しない」

ミツルは数週間かけて、愛の告白を手紙にしたのだが、カヨコにとっては難解な記号にしか見えなかった。

「つまり、どういうこと？ さっぱり分からない」

「……カヨコのこと好きだから」
驚いて少し口をとがらせたカヨコは、

頬をピンク色に染めていた。
「付き合っただけのこと」

「……だったら、一言で終わるのに」
カヨコは、実験が忙しいからとすぐに

サークルにも来なくなった。カヨコの都合に合わせて、ミツルはデートをすることを余儀なくされた。

その日、夜遅くにミツルの家に現れた時、カヨコの表情は少し違っていた。目の下に隈の黒ラインを引いたまま、険しい表情をしており、頬も少しこけたような気がする。

「実験が続いて、大学で寝泊まりしてたの」

抱きしめようと近付くと、シャツの胸辺りのとれかけていたボタンを細い指でつまみ、くるくると回した。

「脱いで。縫ってあげるから」

カヨコは靴から裁縫道具と変わった形をした三十センチ程の長い定規を取り出した。慣れた手つきで糸を引っ張る。

「面白い形の定規だね」

「ここで挟めば、立体の厚みも測れるの。知らない？」

「知らない」

「文系だとこんなことも知らないのね」

顔も上げないまま、カヨコは定規で糸の長さを測った。

「一番良い強度を保つとしたら、針の厚みが二ミリとすると、玉結びに五回転で、糸は二十センチを二重かな」

ぶつぶつ呟きながら、カヨコは細い指で几帳面にボタンを縫い付け始めた。その様子を眺めながら、いつものようにタバコをくわえてライターを傾けた時に、カヨコはふいに顔を上げた。

「私の前で吸わないよね？」

カヨコはタバコが嫌いだ。匂いが移るから吸わないでと言われて以来、ミツルはデートの際には禁煙の場所を選び、待たせるのを嫌って一緒にいる間は全く吸わなかった。我慢できない時は、カヨコがトイレに行った隙を見計らって、慌てて何度も煙を吸い込む。

しばらく会ってなかったから忘れてた。

……なんて言えるはずもなく、ミツルはすぐに「ごめん」と謝り、窓を開けてベランダに出たのだった。

夜道を歩くカップルが街灯に照らされ

て、ぼんやりと浮かび上がる。大学生だろうか。女性の露わになった肌が艶っぽく青白く光っている。耳元で囁き合いながら歩く二人の、絡まった腕が自然と互いの体に密着していく。

「だめだつてば」

焦つてある一線を越えようとしてきた男をなだめるように、ややトーンの高い声が一瞬響いた。思わず喉を鳴らしてしまった。人がいる気配を感じたのか、少し顔を上げた女性と目が合ったような気がした。目を奪われていたミツルは、彼女が笑顔を見せたことにひるんだ。彼女はベランダから覗き見ていた珍客を受け入れたように見えた。

ベランダに置いたままにしていたピールの空き缶の口に吸い殻を押し込めると、足早に部屋に入る。カヨコは、立ち上がってシャツを目の前にかざした。

「はい、できあがり」

先ほどのカップルにあてられてしまったのか、ミツルは我慢できずにカヨコの体を抱き寄せた。そのまま背中をなぞる

うとすると、すぐにカヨコは体を離して、ミツルの目の前で人差し指を立てた。

「ミツル！ 落ち着いて」

「何？ いいでしょ」

そう言っ顔を近づけようとすると、今度は両手で胸板を押しとどめた。

「待って待って！ ミツル。24の約数は？」

「約数？ 約数って何だっけ？」

カヨコの腕に力が入り、なかなか近づけない。

「割り切れる数字だよ」

「えっと、1、2、3、4、6……」

そわそわする体を持て余しながら、天井を見上げる。

「8、12……。24も入る？」

カヨコは頷いた。

「ご名答！」

カヨコの胸の膨らみも、すっぽり収まる華奢な体も、何も変わらずこの腕の中にあるのに、アルコールランプの蓋をパタンと閉められたような気分だ。火種もオイルもあるのに、くすぶりもできない。

目の前の彼女は、満足そうにしている。

この、約数作戦はカヨコの中でブームになってしまったようで、何度も繰り返し返される度にミツルはカヨコに触れるのさえも怖くなってしまった。嫌だと言われる方がまだ良かった。このままずっと蛇の生殺し状態でいられるわけがない。

「と、いうわけで、もう半年近くカヨコに触れていない」

「えー、半年って！ その間、何してたのよ？」

「カヨコは実験で忙しそうにしてたから、月一回しか会えなかったし」

「言いなりで何もできなかったと」

そうまとめたリサは、ミツルと同じ学部で、同じサークル。カヨコとは幼なじみだ。ペリーショートの黒髪がよく似合う。横を向いたリサの無造作にむきだしにされたうなじに、薄いうぶ毛が浮かんでいて、何だかドキツとしてしまう。

「好きなんだけど、これは辛すぎる」

灰皿の隙間を見つけて、また吸い殻を

ねじ込んだ。好きなときに堂々とタバコを吸えるという気持ちの余裕からか、灰皿は吸い殻で一杯になっていた。少し指先に付いた灰を擦り合わせるようにして払う。

「あんたって、本当に女々しいね」

リサは眉を寄せて、呆れた顔をした。

「いつもそうだよ。相手の気持ちばかり尊重して、自分の気持ちを全然伝えてないじゃん。同じような悩みを毎回聞かされるこっちの身にもなってほしいわ。

付き合ってるんだから、少しは強引にいい方がいい。以上！」

「女々しいなんて言うけど、女の方が全然女々しくないじゃん。むしろ男々しいと書いて、めめしいと読ませるべきだ」

ミツルはコーヒーを啜りながら主張した。

「何言ってるんだか」

バカみたいと笑うリサは、そう言いながらも、ミツルが悩みを話すと、いつも話を聞いて励ましてくれる。

「ミツルだって、どうせまたいつものマ

ニアツクな話してるんでしょ」

「別にマニアックじゃないよ」

ミツルは、目が隠れるほどに落ちた前髪を、眼鏡の縁をなぞるように指で脇に寄せた。そうは言ったが、思い当たる節が山ほどある。

カヨコが一番辛そうな顔をしたのはいつだろう。分かりもしないのに、珍しく文芸作品を読んだと言った時か。

「カフカが好きなんだ」

「ミツル、前もそう言ってたよ。だから、私も買ったの。『変身』」

カヨコはそう言って、鞆から真新しい

文庫を取り出した。

「うん、まあ初心者には良い選択だ」

「人間が節足動物になる話でしょ」

「違う、単に虫になる話ではない。あの抜け出られない家は、人間の孤独と欲望で埋め尽くされているだろう？」

「また、始まった」

頬を膨らませてそっぽを向いたが、ミツルは気にせず、持論を語った。どうせ

カヨコに言っても分かってくれない。伝わらないことには慣れてる。けれども、話したいことがあるうちに言葉にしなればとばかりに話した。カヨコはちらとミツルの顔を見ると、眉を寄せて困ったような表情のまま、口角を少し上げた。

いや、もしかすると映画を観に行った時かもしれない。あの時は、カヨコがアクシヨン映画を観たがっていたけれど、こっそり邦画の券を二枚買って劇場を間違えたふりをした。

「何で最初に言った映画のチケットじゃなかったの」

劇場を出ると、目を三角にしたカヨコがぶつくさ文句を言う。

「でも、観てよかったですよ？」

満足してにやついたミツルは、また調子に乗って持論を展開した。

「だから、あの父親が最後に言った台詞が、最初のシーンの暗い部屋を暗示しているんだよ。つまり、無限にループする

仕掛けと言うか」

カヨコは口をとがらせた。

「あの台詞にそんな深い意味ないもん」
いつもそうだ。のれんに腕押しとはこのことだ。

「どうせ、カヨコには分からないよ」

ミツルがそう言うと、カヨコはうつむいた。顔を隠すように垂れた横髪を耳にかけると同時に、目をまっすぐ上げた。

「どうせ、私には分かりませんよ」

そうして、少し溜息をつくとにっこり笑った。

ミツルは頭を抱えた。マニアックな話の何が問題なのだろう。

「でも、カヨコだって最初は不満そうな顔をするけど、いつも最後は笑ってるよ」

リサは、コップに刺さったストローをくるりと回した。

「それって、呆れてるんじゃないの？」

アイスコーヒーはほとんどなくなり、溶けかけた氷だけが音を立てて回った。

リサはミツルを見ながら、複雑な気持

ちでいた。カヨコからも、付き合い始めた時からずっと同じように相談を受けていたからだ。

「ミツルの気持ち全然分らない。ミツルの考えていることも、口から出てくる言葉も、全然分らないよ」

大学近くのレストランにリサを呼び出すと、カヨコはいつものように悩みを吐露し始めた。

「まあ、少し分かりにくい表現をするだけでしょ。それがあいつの個性なんだし」

「でも、相手に伝わらないと意味がないでしょ。言葉なんだから」

「そう言うカヨコは、ミツルにちゃんと気持ちを伝えているの？」

「えっ……」

少し目を泳がせた。リサは困っているカヨコの様子をじっと見ていたが、ふとそらすと厨房を眺めた。カヨコを困らせて楽しんでる自分がある。そのことがもどかしい。

「好きだって表現してるみたいだけど、

ミツルには伝わってないよ。もっと自分の言葉で伝えてみたら」

この場で突然立ち上がって、私に相談しないでよ！ と叫びたくなる。けれど、気持ちとは裏腹に、至極優しい言葉が口から次々に出てくる。

真剣な話をしても、レストランの中は騒がしく、気持ちが途切れる。厨房の端で説教されている女性がいる。きつと新人なんだろうな。怒っている男性シエフとは違う、真っ白な制服が光っている。まだこの忙しさに馴染めていない新人なのだろう。

「もう別れようかな……」

カヨコが呟いた。同時に、カヨコの頼んだカレイライスが運ばれ、目の前に皿が置かれた。リサはコップを持ち上げた。テーブルに水で描かれた円が何重にも膨れている。お先にどうぞ、というように手を差し出した。カヨコはスプーンを持ち上げた。

「あなたがそんなに弱気なら、私がとっちゃうからね」

カヨコはスプーンをくわえたまま、目を丸くした。ごてごてしたまつ毛の店員が、会話をかき消すようにリサのパスターを運んできた。甘ったるい店員の声が耳触りだ。

冗談めかして言いながらも、こうやって二人からの相談にのることしかできないということはよく分かっている。いつの間にか、新人の説教も終わっていた。怒っていた男性シエフは、戻ってきたまつ毛の店員と仲よさそうに喋り始めた。もうこの店には来ない。リサは食べる前にそう思った。

カヨコから受けた相談のことを思い出しながら、リサはまたストローをくるりと回した。ミツルは煙草をふかすと、灰皿の隙間に吸いがらを押しこんだ。灰を払うと、もう一度前髪を横に流して言った。

「カヨコだって、理系のマニアックな話するもん」

リサはふうと溜息をついた。ミツルも

同じだ。自分の気持ちを伝えていない。伝えなければ、通じるわけなんかない。

「とにかく、カヨコに会って、思っていることを伝えなさいよ」

ミツルは少し考えた後、肯いた。

「わかったよ、リサ。ありがとう。もう一度、カヨコに会って話してみる」

リサは目を細めた。立ち上がり、手を振って出ていくミツルを見つめながら思った。気持ちを伝えていないのは私も同じか、と。

街灯もぼつぼつとしか灯っていない深夜、カヨコは大学の研究室を後にするところで、思わず、わっと声を出した。正門の前で立っていたのは、ミツルだった。

「どうしたの、こんなところで」

「伝えたいことがあって待ってた」

「ずっと？」

肯くと、カヨコは言った。

「連絡してくれればいいのに」

「だって、メールも無視するじゃん」

「忙しいんだもん」

カヨコはむっとした。どうしていつも、会おうと怒らせてしまうのだろう。

「じゃあ、また明日」

カヨコは一緒に出てきた男子学生に声をかけられた。

「うん、お疲れ」

カヨコが手をあげると、集団になって

男子学生たちが通り過ぎた。横目でちらとミツルを見ながら、何かひそひそと呟いている。ミツルはみんながいなくなるまでじっと待った。

「誰？」

「同じ研究室の人たち」

「全然女子がいないじゃん」

「だって女子は私だけなんだもん」

ミツルはついポケットに入っていた煙

草に手を伸ばした。いや、吸ってはだめ

だ。ミツルはカヨコに近付くと、ぎゅつと抱きしめた。

「ちよつと、ミツル。外だよ」

カヨコは体を離そうと両手で押し返す

が、ミツルはより腕に力を込める。

「ミツル、苦しいって」

どんと強く突き飛ばした。

「だって、全然会ってなかったじゃん」

もう一度、近付こうとすると、カヨコは言った。

「落ち着いて、ミツル。48の約数を数えてみて。ミツルの誕生日でしょ。4月8日」

すると、ミツルは一度もつつかえずに

すらすらと数字を答えた。

「1、2、3、4、6、8、12、16、24、

48。約数だって何回も言わされたら覚えるよ」

ミツルは、カヨコの肩に手をかけた。

「待って、じゃあ75は？」

「約数ばかり数えさせて、俺のことず

つとバカにしてたんだろ！」

「違うよ。待って、数字の中で48と75は

……」

「もう良いよ、数字の話は」

ミツルはつかんでいた肩を勢いよく突き放すと、歩き始めた。後ろでカヨコの

声が開こえた。

「待って！ ミツル！」

呼び声が胸に突き刺さる。何だか背中から細くて白い糸が大量に出ている気分だ。カヨコへと向かってそれが細かく波打ちながら伸び続けている。でも、ここで振り返ってはまた同じことの繰り返しだと思ひ、前に踏み出した。

深緑をかき分けるように、道のないような森の中で、車を走らせていた。旅行雑誌をめくるリサが、助手席に座っている。

「この天然水で作られた豆腐だって、食べてみたいな」

「どのあたり？」

「ちゃんと前見ないと危ない」

手元を覗きこもうとしたミツルの頭をこつんと小突いた。

「ごめんごめん」

大学にいと、カヨコと一緒にいた日々のことを思い出す。何をしていたってカヨコのことを思い、その度にこの環境から逃げ出したくなる。ミツルはリサを誘って、旅に出たのだった。

「昔は文豪がこういう旅館に住みついて小説を書いていたんだ。部屋に籠って書いて、疲れたら小川のほとりを散歩する。何て良い生活なんだろうね」

「時々、ひと夏の恋なんてしてね。それをまた小説のネタにするのよ。全く良い身分だわ」

旅館の一階にある和食店に入った。老舗の店で宿泊客以外も利用できる。リサが雑誌で見つけたのだった。

ミツルの蕎麦が運ばれてきた。つゆの蓋を開け、箸に麺を絡みつけると、黒いつゆの中に勢いよくぐらさせてずつと啜った。リサは親子丼を頼んでいたが、井に蓋がついていた。隣にある味噌汁も蓋が閉まっている。両方を丁寧に開けると、ゆげと一緒に鮮やかな黄色が目飛び込んだ。リサは言った。

「調理している人は、開けられるためにこの蓋を閉めたんだと思うとき、最初から閉めなければいいと思わない？」

「誰かに開けられるために蓋をする。開ける楽しみを提供してるんだよ」

「それが日本の心とか、このひと手間がおもてなし、とか私は言いたくないな。迷惑に感じる人もいるのよ。シンプルにいけばいい」

「リサらしいな。言いたいことは隠さない」

そう言って、ミツルはふと笑った。

「そう。そういう会話をしたかったんだ」
ミツルは蕎麦をまた一口吸うと、窓の外を見やった。窓からは生い茂る木々と流れる小川が見える。リサは知っていた。ミツルはいつでもカヨコの面影を追っている。本当に言いたいことが何かなんて興味がないんだ。私とカヨコの言葉を比較すらしていない。あの目は何も見えていない。一緒にいても、どこにもいないのと同じ。

夕暮れになり、人通りの多い小道に出た。古民家風の雑貨店に寄りながら歩いた。

「ねえ、これおそろいで買おうよ」
リサが小さな石の付いたストラップを

持ち上げた。店員の女性が近づいてきた。
「彼氏さんには、この青いストーンはいかがですか。秘めたる情熱という意味を持つていて、集中力が高まるんです」

「いや、彼氏では……」

苦笑いして、ミツルの方を向いた。ミツルは何かに気付いて、店員に話しかけた。

「このプレスレットはなぜ48と75の数字がストーンに書かれているんですか？ほら、ここにうっすらと彫られてる」

「ああ、これね。ちよつと面白いものを見せてあげますよ」

すると、店員の女性は48と75と書かれたストーンを紙の上へ並べ、ペンをとって数字を書き出した。

「48の約数は、1、2、3、4、6、8、12、16、24、48。75は……」

間髪いれず、ミツルが言った。

「1、3、5、15、25、75」

「彼氏さん、数学得意なんですか？」

「いや、彼女が数字にうるさくて」

店員がちらりとリサの方を見た。リサは、

何も言わなかった。その表情を見て、店員は少し戸惑ったように眉を寄せた。
「1とその数字以外を足してもらえますか？」

「48は……75」

「75は……」

ミツルは、はっとした。

「48になる」

「そうです。自分の和が相手になる。相手の和が自分。この二つの数字を婚約数と呼ぶんですよ。だから、このプレスレットを作ったんです。ロマンティックでしょう、数字って」

店内にはストーンと共に、いたるところに数字がちりばめられていた。力を持つという神秘的な石と数字の不思議さが重なり、宇宙空間のような広がりを感じる。

「彼女の誕生日が7月5日なんです」

ミツルの言葉を聞き、店員の女性は何も言わずに微笑んだ。

店を出て車に乗り込むと、リサが外か

ら運転席の窓を叩いた。開けると、すうっと涼しい風が吹き込んだ。ミツルは言った。

「乗らないの？」

リサの短い髪が揺れた。

「ミツルは、カヨコに会いに行くんですよ」

「カヨコがどうして数字にこだわっていたのか、分かった気がするんだ。カヨコにとつて、数字が自分の言葉の代わりだったって気付いたんだ」

リサは後ずさりして、車から少し離れた。

「早く行って。私は、もうちよつと旅を楽しんでから帰る」

早口にそう言うと、リサは踵を返した。ミツルは何も言わずに、静かに窓を閉めた。背中が発車する音を聞きながら、リサは指で目の下をすつとぬぐった。溜まっていた涙が頬に流れていき、車が離れていくのを感じると、少しほっとした。

「カヨコ！」

携帯電話を耳に当てたまま、窓を開けたカヨコに、下からミツルは呼んだ。

「話したいことがあるんだ」

家から出てきた部屋着のカヨコを助手席に乗せて、車を出発させた。

「こんな夜遅くにどうしたの？」

「その紙袋開けてみて」

小さな紙袋から、プレスレットが二つ出てきた。

「カヨコの言ったこと、分かったんだ。俺たちの誕生日は、婚約数だろ」

丘の上で車を停めた。真っ暗で少し不気味な闇も、車の中になればなぜか安心した気持ちになる。目の前には星と同じくらいの無数の夜景の光が広がっていた。

「私だって、文系男子の気持ちを分かろうって、ミツルの好きな本や映画を勉強したよ。でも、全然理解できないの。そんな時に、数字で愛を語る方法っていう本を読んで、それなら私の気持ちを伝えられるかもしれないって思った」

ミツルは何も言わなかった。次から次へと出てくる言葉に静かに耳を傾けてい

た。

「私にとっては、単なる数字でしかないよ。だけど、文系の君にとっては、もしかしたら数字だって運命に感じる事柄かもしれないって思ったの」

ミツルはカヨコの頭を抱いた。

「分かったよ。だって俺たちの誕生日だもん。カヨコは、カヨコのやり方で世界を共有しようとしてくれていたんだね」

「……また、そういう分からない言葉使いをするんだから」

そう言っ、カヨコは泣いた。

無数の星は瞬きながら、じっとそこにあった。必死になって宇宙の法則を探そうとしている人間を見守っているかのよう。に。解明されることを静かに待っていた。

それから一月くらいして、ようやくカヨコの休みができた。ミツルは例の石の店に連れて行こうと車を運転していた。

「ミツル、この道は渋滞してるよ」

「分かってる」

「十分で一メートルってことは、目的地まで四時間三十分。たぶんこの遅さは、この先に事故か何か起きたんだよ。で

ないと、二時間も渋滞で遅れるわけない。二時間も遅れるってことは、だいたい前に数百台単位で車があるってことだもん」

「カヨコ。計算したって仕方ないよ。別に急がなくてもいいでしょ」

「急がないとお店閉まっちゃう」

「閉まったら、また明日行けばいいさ」

カヨコはまた唇をとがらせた。ミツルは渋滞で車が停まったことを良いことに、ぎゅっと前に出した口をその上から重ねたのだった。

(了)

惨めだったのか。他人も、自分も不幸
せなやつだと思っていたのか。そうかも
知れない。しかし、子供の頃から、ポケ
ットに星屑をつめていた。いつもこころ細
い時にはポケットのなかの闇をまよぐく
た。明るい絶望というものだってあるの
さ。真暗なポケットに宇宙があり、希
望の星はそのうちに太陽系に飛びだ
す。うつむいて歩きながら、そう考えて
いた。あの頃、辛さと屈辱を味わったは
ずなのに、いまは懐かしい。たぶん人に
とって大切なことはポケットの中の星屑
なのだ。

浅井慎平「ポケットに星屑を」

Philosophy of Stardustbooks

——文化系の趣味を持つ人々をつなぎたい。

「自分と似た趣味を持つ人が世の中に存在しているのだろうか？」

そう思ったとき、手にとった雑誌が教えてくれた。

“あなたは、一人ではない” 自己表現して、セカイとつながる。

スポーツが好き。アウトドア
が好き。決して嫌いなわけでは
ないけど、たまにみんなとノリ
が合わないときがある。

小説が好き。映画が好き。漫
画が好き。でも、オタクと呼ば
れる人たちとは少し違う気が
する。

ひとりで考え込み、ノートに
書きつけ、誰かと出会いたいと
試行錯誤を繰り返す。

そんな人たちがつながり、自
己表現する場をつくりまします。

星屑書房 ★
STARDUST BOOKS

星屑書房は文化・芸術活動を推進する団体です。

stardustbooks@live.jp <http://stardustbooks/soragoto.net/>

編集後記



一路真実

ポップな作品を書きました。
イヌとペンギンはお休みです。



To's jpb

近々、石膏デッサン教室を開きます。
e-mail:dessin@friend.ocn.ne.jp



鳩山豆子

新しく創星に参加して下さった方
ありがとうございます！とても嬉しいです。
最近はわりと積極的に短歌を作っています。



しなおかななし

心臓がみつほしくなったり、身体を取り替
えたくなったり。振り潰したくなったり。そ
ういうのは全部我がままで、ただひとつで
できることを一生懸命やるしかない、本当は
ちゃんとわかっています。



詠人不知

なあ〜てえ〜



衣空

初めまして。夏目漱石と寺田寅彦とロ
ックンロールと映画を喰らって生きて
います。
趣味のブログもやっています。
<http://klaparen747.blog76.fc2.com/>



馬場貴生

色々な映画を観ていると、愛は痛いも
のじゃないかしらんと思いました。作
家は、愛だのなんだのと真剣に考えて
しまいます。



mai

ネットで出会った「創星」に自分の短歌を載
せていただけるなんてうれしいです。ありが
とうございます。これからも世界をひろげて
いきたいです。twitterは@mai_darlinglove
よろしくお願ひします。



天沼太郎

先日引っ越しました。新居は防音がし
っかりしていて、夜中でもCDが聴けま
す。おかげで夜更かしばかり。
困った。
mail:doguramagura71@gmail.com



マチコ・ファルケンボーグ

製本作業の2時間前にプリンター
がこわれ…ミスターマックスに走
って新しいプリンタ買ってきまし
た。

星屑書房について &メンバー募集！！

星屑書房は好き勝手に表現活動をしていく文化系サークルです。
現在は、フリーペーパーの制作・配布が中心ですが、今後は幅広く、文化系活動をしていく予定です。
本を読むことが好き。本を自分で作ってみたい。
映画を観ることが好き。映画を撮りたい。・・・などなど、文化系趣味を持つ人々をつなぎます。
社会人が中心ですが、誰でも入会OK！「こんな活動してみたい！」という提案募集中☆
少しでも興味を持たれた方はこちらにご連絡ください！ stardustbooks@live.jp
お待ちしております！

創星 第8号

2013年10月20日 初版

発行元 星屑書房

<http://stardustbooks.soragoto.net/>

©2013 STARDUST BOOKS, Printed in Japan.

本書を無許可で複写・複製することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。